昭和46年10月10日発行通巻31号(毎日曜日発行) 昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日=ラルース

10/10
220円
31

週刊 世界動物百科



野山に獲物を追う! 捜す! 走る! 捕える!

イヌ・シリーズ

2. 狩猟犬

グレーハウンド、ポインター
セッター、ダックスフント
スパニエル、テリアなど

朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(２)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。《１～64号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第１号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目　次

世界動物百科　第31号

カラーページ

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注１〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について
本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，１部につき30円です。
朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100 TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島３－３　〒530 TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802 TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄１－３－３　〒460 TEL052－231－8131

次号予告

10月６日発売



世界動物百科
32号　10／17

カラーページ

食肉目 裂脚亜目
イヌ科 イヌ属 家犬（つづき）
番犬
山地犬，番犬，ピンシェル類，スピッツ類
日本犬，牧羊犬，ブービエ類

家犬には，人や家畜あるいは飼い主の財産を守ろうとする性質があります。紀州犬，四国犬などの日本犬もこの番犬に含まれます。飼い主に忠実で粗食に耐え，しかも勇猛な気質を備えた日本犬に，わたしたちは鏡に映った自分の姿を見るような気がします。

私たちの仲間

狩猟に生きる日本犬　《現地ルポ》　編集部
日本のイヌ――その特性と歴史　カラーページ解説　内田　亨
いよいよトウメイ高速へ　ヒグマと２人のイノシシ　30　畑　正憲
浮世絵にもなったキンギョ　動物渡来記　５（最終回）　上野益三
私たちの仲間総目次(17～32号)

紀州犬のおもしろさ

近藤啓太郎



紀州犬の「風丸」。呼び名は〝チュウ〞

房州鴨川在の我が家には現在，紀州犬が3頭，柴犬が2頭いる。この5頭の中で，いちばん年上は，柴犬のイシで，満6歳になる。つまり，イシは6年前から，我が家に飼われているわけである。

イシが飼われてから半年ほど経った頃，牝のチビが信州から送られて来た。さらにまた半年ほど経った頃，紀州犬のゴリとヒメが我が家に飼われるようになったのである。

ゴリは日本犬保存会の血統書に，「那智竜」と命名されているが，どうもナチだとかリュウだとか呼ぶには適わしくない風貌の持主であった。

ゴリは団子鼻で眼が細く，一見豚に似ていたが，その反面，何かを警戒したときの表情には，ゴリラを連想させるような凄味があった。豚とゴリラの合の子のような趣があったので，ブタと呼ぶわけにはゆかず，ゴリと呼ぶことにしたのである。

ヒメは「白峰女」と命名されていたが，深山のお城の姫君のような気品が感じられたので，ヒメと呼ぶことにした。因に，イシは「威獅丸」であり，チビは「千美」であった。

さて，ゴリとヒメが我が家に来た頃，イシは満1歳，つまり大人になったばかりだが，実にやさしい兄貴分で，弟分と妹分を可愛いがって，良き遊び相手になっていた。

ゴリとヒメは生後半年も経つと，柴犬のイシより遙かに大きくなったが，まだ何をするにもイシをたよって甘えているようであった。食餌のときでさえ，イシは決してゴリたちを威嚇するようなことがなかった。

が，ゴリが生後1年近くになるにつれて，イシの態度が変わってきた。ふざけている最中に，急にイシがゴリを威嚇するようになってきた。ゴリの方が軀が大きいので，ふざけっこの最中に優位に立ってしまうことがあるのだが，するとイシが本気になってゴリをおどかすのだった。そのくせ，イシは牝のヒメにひっくり返されても，決して怒らなかった。

ゴリとヒメとチビがふざけっこをしているときでも，イシは不意にゴリに走り寄って来て，おどかすようになり出した。ゴリはおどかされると，尻尾を下げ，耳を倒して，全身をすくめた。すると，イシは気がすむのか，ゴリからはなれて行った。

が，そのうちにイシはただ唸っておどかすだけではなく，ゴリを少し噛むようになってきた。ゴリはすっかり怯えて，地面に仰向けにひっくり返り，悲鳴をかすかに上げながら，イシに全面降伏の意思表示をした。

どうも大きな図体をしながら，ゴリは情けない限りだった。ゴリはイシにはかなわないものと思いこんでいるのであろう。イシはまた，そういう観念を徹底的にゴリに植えつける気でいるに違いない。つまり，イシは力をつけてきたゴリに対して，ボスの座を奪われまいとして懸命になっているようであった。

ゴリはまる1年経った頃になると，イシにおどかされて仰向けに寝ころがりながらも，かすかに呻って反抗を示すようになってきた。ゴリも知恵が発達してくると共に，何ひとつ悪いことをしないにかかわらず，自分をいじめてばかりいるイシに対して，口惜しさを感じ出したのであろう。と云って，かすかに呻りはするものの，さらにイシにおどかされると，ゴリはまた他愛なく悲鳴を上げた。

私はボスの座を守ろうとするイシの本能は無理ないと思うものの，その一方，いつもいじめられてばかりいるゴリが可哀そうであった。

そんな頃のある朝，私がゴリ，妻がイシを連れて，運動に出ようとした。門を出るとき，イシが何の理由もなく，またゴリをおどかして少し噛みついた。ゴリはひるみながらも，少し呻り返した。

「ゴリ。やれ！」

と私は瞬間，けしかけてみた。

あっという間だった。ゴリは電光石火の素早さで，イシの頸筋をくわえるなり，空中に放り上げ，地面にたたきつけ，そのまま強烈にふりまわしつづけた。イシは絶叫しながら，悶え苦しんだ。

「イシが死んじゃう……！」

と妻が叫び，私も青くなった。

私はゴリの腹を両手で抱えて，ひっぱった。私はゴリの後足で足を蹴飛ばされて尻餅をついたが，その間隙にイシはゴリの牙から逃れることが出来た。たった1,2分の出来事だったが，イシの頸は曲がったままになってしまい，うつろな眼差になってぼんやりと立ち竦むばかりだった。

イシの運動をとりやめ，傷の手当をした。曲がった頸も暫く経つとまっすぐに



早朝の浜べを散歩する近藤さんと〝チュウ〞，長女・文さんと〝ゴリ〞（千葉・鴨川で）



柴犬の「威獅丸」。呼び名は〝イシ〟

なってほっとしたが，今後は絶対にイシとゴリを一緒に庭へ放すわけにはゆかないと思った。

翌朝，運動に行くとき，イシはゴリが近づくと，尻尾を下げて逃げようとした。が，数日経つと，イシはもうこわさを忘れたのか，ゴリに近づいて唸り声を上げた。

唸られると，ゴリも唸り返したが，ゴリの方から先にイシをおどかすことはなかった。こういう点が，同じ日本犬でも紀州犬と柴犬の相違であろう。猪猟専門の紀州犬は豪胆であるし，鳥や兎の猟に使う柴犬は神経質である。

イシは，庭へ放すと，さっそくゴリの犬舎へ飛んで行き，金網ごしに吠え立てた。ゴリも牙をむいて，吠え返した。が，ゴリは庭へ放しても，殊更にイシの犬舎へ飛んで行きはしなかった。むしろ，庭のゴリを見て，イシが犬舎の中から吠え立てた。すると，ゴリもイシの犬舎へ近づいて行き，好戦的に尻尾をふり立てながら，イシを睨み据えた。イシはヒステリックに吠えつづけ，そのうるささに腹を立てて，ゴリも唸るだけではなく，やがて吠え返しはじめるのだった。

そういうことが半年ほどつづいてから，ゴリに変化が見えはじめた。ゴリを庭に放すと犬舎の中のイシが吠えもしないのに，今度はゴリの方から積極的に近づいて行くようになったのである。そして，イシが吠え立てると，ゴリはそれを尻目に片足を上げて小便をする。小便をした後，イシの方に両足で地面を蹴上げて，土砂をひっかけた。それから，吠えたてるイシの傍へ行き，面と向かって尻尾をふり，さも面白げに小首をかしげて見せながら，牙をむくイシを眺めやった。

イシはすっかり馬鹿にされて，いっそう躍起に吠えたてたが，すると，ゴリはまたいっそう馬鹿にしてからかうように尻尾をふって見せるのであった。

ゴリがまだ満1歳にならぬ頃だったが，雨まじりの風が吹く夏の夕方，ゴリとヒメを庭に放しておいた。私たちが夕食をすました頃，ゴリが庭中をいままでにない動作で走りまわっていた。兎のように跳び上がっては走り，また跳び上がっては走っているのである。

「ゴリの奴。大変だ，大変だって云って，走っているみたい」

と小学生の長男が感じたままに云った。

そう云われてみると，なるほどそんな感じであった。

「ヒメは？」

と云いながら，妻が雨風の庭へちょっと出て見た。

「いないわね。ヒメがお産をしているんじゃないかしら？」

妻はヒメの犬舎の方へ行き，私もあとを追った。すると，もうゴリがヒメの犬舎の前に坐りこんでいた。金網で囲った運動場の中の寝小舎に向かって，ゴリは首をかしげながら聞き耳を立てていた。妻が寝小舎を見に行き，私をふり向いて云った。

「いま1匹，生まれたところだわ」

「そうか。いや，やっぱり，ゴリの奴，大変だ，大変だって云って，庭中を走って見せていたんだな。ゴリ，お前は偉いぞ」

と云って，私はゴリの頭を撫でてやった。

ゴリは私にちょっと尻尾をふって見せてから，また首をかしげて心配そうにヒメの寝小舎の方へ聞き耳を立てた。

ヒメは牡2頭，牝1頭の仔犬を生んだ。風の日に生まれたので，「風丸」「風助」「風姫」と命名し，3頭のうち中位の大きさの風丸を家に残し，チュウと呼ぶことにした。

ヒメは初産ながら，仔犬の育て方が上手であった。上手というよりも，ヒメは母性本能にすぐれていた。仔犬が股の下の乳首に吸いついていると，10分でも20分でも片足を上げぱっ放しにしている。さぞ，疲れることだろうが，空中に片足を浮かしたまま，絶対に下げずに仔犬に圧迫を加えなかった。

仔犬に食餌をあたえるようになると，ヒメは仔犬が食い終わるまでは，自分は食べずにじっと見守っている。哺乳中の母犬ほど空腹なものはなく，さすがにヒメもよだれを垂らしながら，見守っているのであった。食餌はヒメと仔犬の両方にあたえてあるのだが，仔犬は気ままに両方の食器に首を突っこむので，ヒメはがまんしなければならないのだった。

私はヒメを犬舎から出し，別に食餌をあたえた。すると，ヒメは食べ終わるやいなや，犬舎に戻って行き，網戸を開けるように吠え立てた。網戸を開いてやると，ヒメは中へ入ると同時に，いま食べたものを嘔吐して仔犬にあたえた。仔犬にも食餌はあたえてあるのだが，ヒメは自分だけしか食べていないと思うのであろう。で，今度は金網を境にして，ヒメと仔犬がお互に見えるところで食餌をあたえた。見えるところでも，ヒメは消化の悪い食餌だと思うときには，金網ごしに仔犬に向かって嘔吐してあたえようとするのだった。

が，ヒメはふだん，私たちに対して不愛想な犬であった。ヒメに限らず，ゴリもイシも不愛想である。愛想がいいのは，チビだけだ。チビは尻尾だけではなく，尻ぐるみふり立てるようにして，私たちに甘えた。甘えて，私たちのご機嫌をとって，可愛いがられたいようであった。

が，イシやゴリやヒメは，私の方で呼んでも，気が向かなければ尻尾ひとつふらなかった。呼び声に反応して，ちらりと私の方に眼を向けるだけで，あとは知らん顔である。あまりそっけないので，しつこく名前を呼びつづけると，面倒臭そうな顔で，ほんのお義理に，尻尾を2,3度，ふって見せるだけで，私の方に近づいて来ようともしないのであった。

が，私は日本犬のこの不愛想な性質が好きなのである。その点，私はチビを好まない。洋犬のように媚びへつらい，愛嬌をふりまいて，飼主に可愛がられようとするようでは，日本犬としての値打がない。日本犬は人為的な西洋犬に対して，原始的なところに値打があるのだ。原始的で，いまだに獣としての性質を失わぬ点が，日本犬の値打だった。その点，西洋犬は生きている玩具といった傾向が強く，獣としての魅力に欠けるのであった。

日本犬が尻尾をふり，鼻声を出して甘える場合は，犬自身が嬉しいときである。犬自身が嬉しいから尻尾をふるだけのことであって，それによって飼主に可愛いがってもらおうとは思っていない。我が家の犬が最も喜ぶときは，私が仕事で上京し，家を留守にしていて，久しぶりに帰ってきたときである。

ゴリもヒメも，それこそ千切れるばかりに尻尾をふりまわし，恋しげに嬉しげに鳴き喚く。ところが，妻や子供たちが家を留守にしていて帰ってきても，犬どもはさほどには喜ばない。尻尾をふるにしても，私のときほど夢中になってふりはしないのである。

「口惜しいわね。ふだん，わたしたちのほうがあなたより，よっぽど犬の面倒は見てやっているのに……。これ，いったい，どういうわけ？　ゴリ。お前なんか嫌い。向こうへ行きなさい」

と妻は口惜しそうにゴリにあたった。

「おれがこの家のボスだっていうことを，犬はみんな知っているのさ。特に，日本犬は原始的だから，そういう関係に敏感なんだよ」

と私は妻に応えながら，ゴリの頭を撫でてやった。■

（こんどうけいたろう・作家）



近藤さんにからだを洗ってもらう紀州犬の〝ゴリ〟こと「那智竜」


プードルの
チロちゃん

見つめる黒い目

石井好子

幼いころから，家にはいつもイヌがいた。そのころはまだ郊外だった大森に住んでいたので，番犬という意味もあったのだろう。

まず，ノラという雑種がいた。ノラ犬がすみついたので「ノラ」と呼んでいた。そのうちシェパードを飼うようになった。あるときには，ワイアヘアードテリアがいた。スコッチテリアのいたこともある。しかし，わたしはそのどの犬にも，特別の愛情を感じたことがなかった。ワイアヘアードテリアがヒラリアで死んだとき，姉はワーワー泣いて悲しんだ。わたしも悲しまないと悪いような気がしたが，涙が出なかった。

わたしは小学生のときブルドッグにかまれてから，犬はなんとなくこわくなり，あまりそばに寄らなかった。10歳くらいのころだったと思うが，父がブルドッグの成犬をもらってきた。「いい犬だろう」と自慢だった。数日後，わたしと弟たちとがベランダで遊んでいたら，鎖を放れていたそのブルドッグがとびかかってきた。今思えば，いっしょに遊びたかったのだと思うが，私たちはキャーッと叫んで逃げたので，追いかけてきてわたしのスカートにがっしりかみついてはなれない。おとなたちが，やっと引き離したときの光景を，わたしはいまだに忘れることはできない。傷はかすり傷にすぎなかったが，恐怖のほうが大きかった。そのブルドッグは人手に渡り，そのあと牛にかみついて殺されたとか聞いた。わたしは用心のためと，狂犬病予防の注射に毎日通わされた。とても痛い注射だった。その後しばらくは，犬を見るとよけて歩いた。

だからわたしが犬を飼い，その犬に夢中になるなどとは想像だにしなかった。猫はもっときらいだった。じっと大きな目でみつめられると，気味が悪くて身動きもできないころがあった。

7年ほど前，姉の息子が思いあまったようすで小さいプードルをかかえ，夫に飼ってくれないかと頼みにきた。わたしでは断わられると思って，夫のもとへきたらしい。プードル会の会合で，姉が「かわいい，かわいい」と譲り受けたものの，姉の家の庭にはシェパード，なかにはダックスフントがかけずり回っているので，「チロ」という名の小さいトイプードルは，おびえてぶるぶる震えつづけるありさま。夜は息子と寝てほっとしていても，学校にいかれてしまうと，またぶるぶるなので，飼うわけにはいかなくなったのだった。

おかしな形に刈りこんだ小さいプードルは，猫くらいの大きさだし，白目がちに見上げる顔は卑屈で，わたしはぞっとしてしまった。「困ったわね」といいながらも，しかたなく飼うことにしたが，犬のことは全然わからない。「何を食べさせたらいいの」と聞くと，ドッグフードでいいというから，箱からお皿に山盛りごろごろと出して鼻先へもっていくと，ぴょんととびすさって逃げてしまった。ビスケットをやってもあとずさり，ミルクも匂いをかぐだけ。寝るときはベッドの下にかごを持ってきて寝かしたが，ごそごそ動かれたりスースー寝息をたてられたりすると気になって寝られない。とんでもないことになったと情けなかったが，チロもまた同じ気持ではなかったかと思う。

翌日も元気なく，翌々日はますます元気がないのでお医者を呼んだ。ヒラリアの初期といわれ，注射をされたら，かごにはいったまま動きもせずフーフーいっている。なんだかかわいそうになって「いい子，いい子」などといったら，顔をすり寄せてくるので，この小犬もまんざら悪くはないなと思い始めた。

ドッグフードというものは，水にふやかして少し与えるものと知ったが，いちばんいいのは牛肉の赤身と教えられ，さっとゆでて細かく刻んだらぱくぱく食べる。ビスケットも大きなままやればこわがるが，小さくちぎってやれば喜んで食べる。ミルクはあまり好きではないなど，少しずつかれの飼い方がわかってきた。

かれはすでに3歳だったから，なつくにも時間がかかった。今にして思えば，ヒラリアの初期というより，むしろ飼い主が転々と変わったので，ノイローゼになったのではなかったかと思う。

飼い始めてからすでに7年以上になるが，その間にずいぶん変わってきた。はじめは身の置き所もないようにうろうろして，かごにはいっているときだけ安心感をおぼえているようだったが，このころでは床に寝ている横を歩いても，知らんふりで寝つづけている。声をたてれば「うるさい！」といわんばかりにちょっと頭をあげてにらむだけだ。

わたしはことしで歌手生活27年を迎えたが，今までも，また今も外出がちである。犬だってかわいがり世話をしなければ，悪い犬になってしまうに違いないと思い，わたしには犬を飼う資格がないと思っていた。しかし室内犬なら，わたしのような生活をしていても飼えるものである。ただ犬を飼うというのも，子どもを育てるほどではないまでもけっこう世話がやける。その努力だけはしなくてはならないし，それをする気がないのなら飼わないほうがいいと思う。

わたしの場合は寝室にかごを置いて寝ているから，夜と朝はいっしょにいる。このごろはじいさんになったせいで，いびきをかくのだから恐れ入る。いびきをかいたり，寝ごとみたいにニャーンなどと猫のような声を出す。むかしならゾッとしてふるえ上がったかもしれないが，それすらかわいく感じるのだから，わたしも変わったものだ。

朝6時になると起き出すのが，わたしにとっては最大の悩みだ。ベッドの下へきて，「起きろ，起きろ」とばかりかさかさひっかく。知らん顔をしているとベッドにとび乗り，ベロベロなめるので，しかたなく外に出す。だからわたしは，どんなにおそく寝ても，疲れていても，6時には起こされる運命となってしまった。もちろんまた寝るのだが，二度寝はきついので，他の部屋で寝かそうと試みても，夜になると寝室にいくのを待っていて，絶対いっしょの部屋で寝ることに決めているものだから，ついかわいそうになってがまんをしている。

朝起きていくと，すでにお手伝いと朝の散歩を終えて，朝食もすませ食堂にいる。食堂にいるかぎり，何か食べさせてもらえると信じているのだから，こちらがお茶を飲んでも，目をらんらんと光らせ，鼻をクンクンいわせてコーフンする。食事が始まればのびあがってひっかくし，クンクン，ニャンニャン（どうも甘えると猫的な声を出す）といいつづけ，それでもやらないとウーウーと低くうなり，ワンワンほえだす。「君がしつけをしないで，猫かわいがりをするから行儀が悪くなった」と夫は嘆くが，食事


散歩が大好き。石井さんに連れられて，とっととはねるように歩く（東京・高輪で）

をほしがってニャンニャン・ワンワン叫ぶようになったのは，わたしが海外旅行をしていた間にそうなったので，むしろかれの責任である。

　肉をやればいちばん喜ぶが，いつも肉を食べているわけではないから，かまぼこ・チーズ・魚・卵などをやる。それもないと，けずりぶし御飯などをやることもあるが喜んで食べる。

　朝・昼・夕・夜と4回，散歩も兼ねて外へ出す。雨の日，雪の日はたいへんだ。それでも元気なときはまだよいが，なにぶんお年なので，冬はリューマチが出る。

　そこで散歩を休むと，おしっこはしたい，家の中でしてはいけない，とかれは悩み，じっとがまんしている。新聞紙を敷いた箱をそばに持っていって，「さ，お願い。シーシーしましょう」。さらには四つんばいになり，片足あげて，犬のおしっこのまねまでする始末。それでもダメ。しばらく側にいなかったら，立ったままジャーとやっている。その申しわけなさそうな顔のあわれさに，胸が痛んだ。

　わたしが出かけようとすると，チロはそわそわしはじめる。車に乗せてもらえるかと期待しているのだ。車に乗るときは，犬猫病院にいくときなのに，それはわからないらしい。玄関まできて「ダメよ」「ノー」「待ち待ちしてるのよ」といわれると，フンといった態度で食堂へいってしまう。

「きょうは連れていこう」というと，とびあがって喜び，ぐるぐるわたしのまわりを駆けまわる。手の舞い，足の踏むところを知らず，といった姿で，わたしより先にとびだして車に乗る。それからが，またたいへんだ。

　なにしろ外の景色が見たいので，ひざの上だけでは足りず，胸にまでよじ登る。ハーハーとつばをとばしながら外を見ている。ワンワンほえる。バカなやつで，レコード店前に飾ってある，大きなビクターの犬にほえるのである。医者の家に着くと，とたんにしょんぼりする。「頭隠して尻隠さず」のたとえのように，こわくてこわくてお医者の顔がまともに見られず，お尻を向けている。頭をわたしの胸にすりつけて，ぶるぶる震える。

　ヒラリアと診断され，フーフーいっているのが哀れで飼う気になった犬とはいえ，実に故障の多い犬である。耳は片方血うみが出る。目はそこひの中期。歯は歯槽膿漏。前歯が抜けたので，そこから舌がちょろっと出ている。冬はリューマチが起きるので，毎朝アリナミンを1個飲ませて，やっとおさえている。

　お尻は痔。「犬にも痔があるんですか」といわれるが，犬には肛門の両側に，肛門腺があるのだそうだ。その肛門腺が食べ物の関係で，つまったり，ただれたりして，人間の痔のような症状になるという。そのうえに，チロはおできが1つ2つとでき，今は3つもできている。うんちをしたあと，ぬらした綿でそっとお尻をふくのだが，「お願い。いい子ね。痛くしない」などと口走りつつわたしがふく。毛にこびりついているのを取り終わると，汗ぐっしょりだ。



まるで赤ん坊を抱くようにチロを抱く石井さん

　そのうえに，これは飼い主に似てというのか，うつったのか，昨年からアレルギーが起こり，くしゃみ病である。わたしもちょっと暑いところから涼しい部屋にはいると，たてつづけに4,5回くしゃみをするが，チロも同じになってしまった。わたしは立っていたり，腰掛けていてくしゃみをするから別状ないが，かれの場合は，ときとして床に鼻をぶつけたりして気の毒である。

　チロは洗われるのがきらいなので，お風呂場には決してはいらない。お湯をかけると，しょぼたれて見る影もない姿となるが，毛をかわかしブラシをかけると，フワッと毛が立って美しい。毛の質はとてもよいのだが，残念なことに毛の色がよくない。プードルは1色でなくてはいけないのだそうだが，かれはベージュで，耳としっぽが黒である。母犬は純白でチャンピオンということだが，かれは品評会にも出せぬ駄犬なのだそうだ。「チロには，子どもをつくらせないでくださいね」と，かつての飼い主であるプードル会の会長がいった。

　2匹飼うのもたいへんだから，独身だってよいじゃないかと思っていたが，4,5歳のころには春ともなると色気づいて，人の足や腕をからだに巻きこんで，いやらしい格好をする。「嫁さんをもらってやらないと，かわいそうだよ」と夫がいうので，会長にはないしょで捜していたが，なかなかいない。やっと獣医が見つけてくれて，その持ち主から電話があった。「あす連れてきていただけないでしょうか。家のプードルはびっこですけれど，後天的なびっこですからだいじょうぶです」といわれ，わたしは考えこんでしまった。

　びっこが悪いとはいわない。しかし，だいじなだいじなおぼっちゃまが，びっこのお嬢ちゃんプードルと，どんな格好で結ばれるのかと思うと，見たくないとしみじみ思い，からだだってじょうぶじゃないのに無理することもないと，まったく気が進まなくなってしまった。あやまって，とうとういかなかったから，かれは童貞のまま一生を終わるわけである。すまないような気がしたり，これでいいんだと思ったり，母親の気持も複雑である。

　女が小犬をかわいがるときは，やはり母性本能をかきたてられているのだろう。子どものないわたし，子どもはいても皆家を離れ，孫も大きくなって抱く者もいなくなったわたしの母などの犬のかわいがり方は，ほかから見たらおかしいかもしれない。

　かれは10歳，人間ならすでに60歳を越えているかもしれないが，わたしは「チロちゃん」「ベビちゃん」「チーちゃん」と呼んでいる。姉が「おじいちゃん」と呼んだりすると，内心おもしろくない。母がグレーのトイプードルをかわいがっているが，気の毒そうな顔をして「あなたのところは，色が悪いからね」などというと，ムッとなってしまう。

「だってチロちゃんは1000万円の犬よ。チャンピオンだって1000万円はしないから，チロのほうが上だわ」とわたしはいう。1000万円もらっても売る気はないのだから，1000万円以上の犬というわけである。皆ゲラゲラ笑う。

　澄ませば歯の間からチョロッと舌が出てしまうし，お尻ははれてるし，前足が少し曲がってきたし，くしゃみばかりしている犬が1000万円と聞けば，確かにおかしいことだろう。

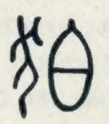
「でも，チロも晩年は運がいいわね」とよく姉がいうが，そのときはまんざらでもない気持になる。確かにしあわせな犬だと思う。そばでうずくまっていたり，ひざの上にあごをのせておとなしくしているときには，ほんとうにかわいいと思う。まっ黒なまん丸い目でじっと見つめられると，何を考え，何のために生きているのかわからないこの小犬の愛情が，わたしの心にじんとつながるような気持がする。

　ぴょんぴょんはねたり，駆けだしたりする姿を見て，夫は「じいさん，がんばってるじゃない」と冗談まじりにいうが，わたしたちはただかれが元気で，長生きをしてほしいと願っている。■

（いしいよしこ・シャンソン歌手）

漢字のふるさと　24

藤堂明保



狛（こまいぬ）　獅子は，中国では見られない西方伝来の珍しい獣であった。しかし仏典では，釈迦が声たからかに仏教を講じたのを「獅子吼」というなど，しばしば獅子という名が出てくる。だから書物の上の知識としては，ひろく中国人に伝えられていた。

　中国では，4，5世紀のころから，獅子は「イヌとライオンのあいの子」のようなイメージとなって，石像に刻まれはじめ，やがて寺院や官署の門前に，魔よけのしるしとして据えられるようになった。後には金持の邸の門前にも，その1対の石像が据えられて，庶民をにらみつけるようになる。その風習が，6世紀になって仏教とともに日本に伝わってきた。日本では，朝鮮（高麗）から伝来したのだというので，コマイヌと名づけたのである。

　狛（貊とも書く）という字は，もともと朝鮮の東海岸から沿海州にかけて住んでいたツングース族のことである。ところが，これと民族的にも縁の近いコグリヨウ（高句麗）をも含めて，日本では朝鮮の人たちのことをコマ（高麗）と総称することが多かった。そこで朝鮮から伝来した動物の名に「狛」の字をあて，狛犬＝コマイヌと訓じたのである。■



1



2



3

狩猟犬

狩猟犬（hunting dogs）というのは，家犬のなかで，主として狩猟に用いられる犬種である。人間とイヌとの出会い以来，イヌが果たしてきた大きな役割に，狩猟があることは疑いのない事実であろう。おそらく，人間が農業を始める以前，すなわち，こん棒と石斧が唯一の武器であった狩猟生活の時代にまで，狩猟での結びつきをたどることができよう。

嗅覚（きゅうかく），スピード，鋭いきばをもつイヌは，少ない武器で野獣に立ち向かう人間にとって，力強い味方であったろう。しかし弓矢の利用から始まって，16世紀の鉄砲の発明で，イヌが獲物を直接殺すことはだんだん少なくなった。

それにともなって，今まで狩猟本能を利用して，まだ犬種の固定していないイヌに，獲物を追わせていたのが，鉄砲の使用でイヌの狩猟目的も分化していったと思われる。獣猟犬では，それぞれオオカミ，キツネ，シカ，ウサギ，イノシシ，タヌキ，アナグマ狩り用となり，鳥猟犬も野禽狩り用，水禽狩り用といったぐあいに専門化するようになった。

日本にむかしからいる日本犬も，種々のけものや鳥を狩猟するのに用いられた。アフリカ産の野生犬リカオンは，習性によってハンティングドッグ（狩リイヌ）の名がついていて，狩猟犬と混同されがちだが，属も種も違う。

現代の狩猟は，生活のためのものはほとんどなくなり，スポーツとしての発展を遂げている。別名スポーツ犬（sporting dogs）ともいわれているのが現代の狩猟犬である。

ウサギ猟犬

ウサギ猟犬（hares hunting dogs）は，グレーハウンド型犬〔注1〕ともいわれ，おもにウサギ狩りに使われるイヌで，狩猟犬のなかでももっとも歴史の古いものと思われる。その姿は，すでに紀元前2000年以上もむかしの古代エジプトの建造物に描かれている。現在，ドッグレース場の主役として注目されているが，家庭犬〔注2〕としても，貴族的な優美さから高い地位を得ている。

どのウサギ猟犬も，大きくて，すらりとし，四肢（しし）は長く，吻（ふん）はのび，胸は狭く深く，腹部はへこみ，しかもすばらしい筋力をもっている。嗅覚（きゅうかく）よりも視覚がよく発達し，遠方に獲物を発見するや，速いスピードで追ってつかまえる。〔注3〕

1　狩猟犬型の雑種。イヌは穴居時代から人間とともに狩りをしていた。そのなかでも，より狩りの得意な犬種は狩猟犬としての特性をのばしていった。
PH. J. L. S. DUBOIS-JACANA

2　ホイペット。グレーハウンドとともにドッグレースの主役である。ウサギ猟犬としての足の速さを誇っている。
PH. PRENZEL-PRESS

3　グレーハウンド。キュッと引き締まった軽快なからだつきと，そのスピード，そして賢さから，イヌの歴史のまっ先に登場している。
PH. PRENZEL-PRESS


1


2


3


4

グレーハウンド（Greyhound）　ウサギ猟犬のなかでももっともよく知られた犬種で、時速60キロというイヌ最高のスピード記録をもっている。後肢（こうし）が前肢より長いから速く走れるわけで、ドッグレース場の人気者である。原産はエジプトで、イヌの歴史の最初に登場する犬種である。体高68センチ、体重25キロほど。短毛で、色の決まりはない。

これからも体高、体重〔注4〕などの数字が出るが、これはすべて成犬の雄のもので、雌は雄よりもやや小さい。また、体高、体重の数字は、規格のなかの平均か、やや大きめをとっている場合が多い。

ホイペット（Whippet）　形の小さいグレーハウンドである。体高45センチ、体重10キロほどで、おそらくグレーハウンドとフォックステリアのかけあわせであろう。原産はイギリス。レース犬，家庭犬として飼われている。

ディアーハウンド（Deerhound）　グレーハウンドの仲間で、むかしからシカ（deer）狩りに使われたスコットランド産の古い犬種である。体高75センチ、体重45キロ余りで、毛は長くてかたい。現在は家庭犬である。

ウルフハウンド（Wolfhound）　アイルランド産で、ディアーハウンドの先祖型とも考えられる。体高80センチ、体重50キロ余りといった大きなイヌで、ウサギ猟犬というより、むしろマスティフ型の番犬に近い。かつては、名のとおりオオカミやシカ狩りに使われた。

ボルゾイ（Borzoi）　もっとも貴族的な姿をしたイヌといわれている。かつてロシア貴族がオオカミ狩りに使っていたので、ロシアンウルフハウンドともいう。ロシア革命後はイギリスで飼育された。美しい波打った絹のような毛をもつために，観賞犬となっている。体高74センチ、体重40キロほどである。

サルキー（Saluki）　ペルシャハウンドともいい，原産はカスピ海から北アフリカにかけた地域である。これも古いイヌで，紀元前2000年以上前のシュメール王国の遺跡にもみられる。体高60センチ、体重23キロほど。

アフガンハウンド（Afghanhound）　ただ，アフガンとも呼ばれる。紀元前3000年ころにエジプトにいたことが確認されている。その後，どんな経路でアフガニスタンにはいったかわからないが，伝説では，ノアの方舟に乗ったことになっている。長い巻き毛の特異な姿で，現在では観賞用である。体高70センチ。

スルギー（Sloughi）　アラビア原産で，のち北アフリカにはいった。アラビア人はイヌをあまりたいせつに扱わなかったが，このイヌだけは気高いものとして区別した〔注5〕。サルキーより，やや小さく，耳に毛がない。

ガルゴ（Galgo）　スペイン産で，スルギーに似ている。イスラムが侵入したときに持ちこんだものの子孫と思われる。体高70センチ，体重30キロは，スルギーよりも大きい。

バレアレスハウンド（Baleareshound）　スペイン原産のウサギ猟犬で，スペイン名ではポデンコイビセンコ（Podenco ibicenco）という。毛は個体差があって，短いもの，長いもの，かたいものがある。特徴はピンと立った耳と，きわめて発達した嗅覚（きゅうかく）。

1　スルギー。　*PH. NAUD–AFRIQUE PHOTO*
2　サルキー。　*PH. PRENZEL–PRESS*
3　ウルフハウンド。　*PH. BUZZINI*
4　ボルゾイ。　*PH. PRENZEL–PRESS*
5　アフガンハウンド。　*PH. E. P. S.*
6　ディアーハウンド。　*PH. BUZZINI*
7　バレアレスハウンド。　*PH. BUZZINI*
8　ガルゴ。　*PH. BUZZINI*



5



6



7



8



1



2



3



4



5



6



7



8

追跡犬

追跡犬（trailing dogs）〔注6〕は，視覚で狩猟をするウサギ猟犬に対して，嗅覚（きゅうかく）を使って狩りをするイヌである。

においの跡をつけて，獲物をかぎだし，ほえながら全速力で飼い主のいるほうへ獲物を追いだす，勢子の役目をする。しかし，勢子としてすばらしい働きをしたタルボ，メルランといったイヌは，狩りたて猟〔イヌを勢子としてウマに乗ってする狩猟〕が衰えるとともに姿を消してしまった。

共通した特徴は，長い吻（ふん），たれた大きな耳，背の上に高くのびる先の細い尾。

ブラッドハウンド（Bloodhound）　フランス原産でのちイギリスに渡った，古い歴史と由緒をもつ犬種である。追跡犬としてはもっともよく知られているもので，フランスの大部分の追跡犬の祖先だという。フランス名ではサンテュベール（Saint-Hubert）という。いかにも心配そうな顔つきをしているが，体高66センチ，体重40キロ余りの大きなイヌで，しかも追跡犬の特徴とする，すぐれた嗅覚の持ち主である。このイヌの名まえには，《血のにおいを追跡する》という意味もある。〔注7〕

ポワトバン（Poitevin）　別名ポワトウともいい，体毛が3色からなっている。現在フランスで，勢子型〔追跡型〕狩猟犬の代表。

ニベルネ グリフォン（Nivernais griffon）　フランスのニベルネ地方に産し，やや長い体毛をしている。イノシシ狩りに欠かせない。

ブリケ（Briquet）　バンデア産のグリフォンともいうが，フランスの狩りイヌとしては優秀なものの1つである。ただ，勇猛のあまり，狩りに熱中すると飼い主のいうことを聞かなくなる，といった欠点もある。

フォックスハウンド（Foxhound）　イギリス産のキツネ猟犬。中型でしかも狩りにいくウマに負けないほどの速力をもつイヌである。毛色は一般に，白，黒，黄褐色の3色で，白と黒，淡黄色と白，といった組み合わせもある。体高60センチ，体重30キロ余り。なお，これをイングリッシュフォックスハウンドといい，アメリカには，アメリカンフォックスハウンドがいる。大きさはほぼ同じ。

ハーリア（Harrier）　キツネも狩るが，とくにウサギ狩りに適している。大きさは体高45センチ余りと，フォックスハウンドとビーグルの中間で，フォックスハウンドに似ている。ウサギ狩りは，キツネ狩りのようにウマを使わずに猟師は歩くから，それにつれてこのイヌも足がおそい。イギリス原産。

ビーグル（Beagle）　イギリスでもっとも小型の狩猟犬といわれている。体高35センチ前後で，あまり速く走れないから，人間の足でもついていける。現在ではフォックスハウンドに近い毛色，手ごろな大きさ，快活な性格のために，家庭犬として評判が高い。

バセット（Basset）　フランス生まれで，鳥やウサギを追って，やぶの中や巣穴の中までもぐりこめるように，小型化された狩猟犬である。四肢（しし）が極端に短いために，体高は低く，33センチ余り。バセットに2つの種類があって，1つは体毛の長いグリフォンバセットで，四肢もやや長いためにウマを使えない岩や木の茂ったなかなどで，ウサギ狩りに使われる。もう1つは，体毛の短いもので，これにはいくつかの犬種，つまり体位は低いが活動的なブルターニュ産のバセット，群れをつくらず1頭で狩りをするノルマンバセット，四肢がまっすぐで敏捷なガスコーニュ産のブルーバセットがある。



9



10

1　ニベルネグリフォン。　PH. BUZZINI
2　ブリケ。　PH. BUZZINI
3　ノルマンバセット。　PH. BUZZINI
4　ポワトバン。　PH. BUZZINI
5　ビーグル。　PH. BUZZINI
6　バセット。（ブルターニュ産）　PH. BUZZINI
7　ブルーバセット。（ガスコーニュ産）　PH. BUZZINI
8　ブリケ。　PH. BUZZINI
9　ブラッドハウンド。　PH. BUZZINI
10　フォックスハウンド。　PH. PRENZEL-PRESS



1



2

指示犬

指示犬（pointing dogs）という名の狩猟犬は，狩り場が広かろうが狭かろうが，そのなかに獲物を求めて走り，獲物を発見するとすぐに立ちどまって，飼い主にそのあり場所を指示する，いわゆるポイントするように仕込まれた鳥獣犬である。

獲物を見つけて立ちどまるや，四肢（しし）をふんばり，鼻をその方向に向けて，からだを緊張させ，尾を水平にのばしてじっと動かず，飼い主が発砲するのを待っている。ポインターの場合は，上の写真にもあるように前の片肢（かたあし）をあげ，尾を水平にして止まり，獲物のいることを無言のうちに知らせる。

フランスの指示犬

ポインター　白い短い毛をしており，そこにたくさんの斑点と，2，3の大きな斑紋がある。耳が長くたれており，大きな頭部，扁平な頭蓋（ずがい），幅の広い角張った鼻をしており，上くちびるがたれて下あごにかぶさっている。尾は長いのだが断尾〔注8〕されていることがある。体高は50センチから65センチで，からだはがっしりしている。

フレンチ ポインター（**French pointer**）は，ごわごわして密生した毛をもち，毛色は白地で，暗褐色の斑紋がある。

ブルボン ポインター（**Bourbonnais pointer**）《ブルボン家のポインター》といわれ，白地に赤褐色の斑が美しく，優雅な姿をしている。猟犬としての能力もすばらしくすぐれている。体高は58センチ以内。

サンジェルマン ポインター（**Saint-German pointer**）イングリッシュポインターとフレンチポインターとの交配によって生まれた犬種である。くすんだ白い毛並みには，だいだい色の大きな斑紋があって，目は黄金色をしている。

デュプイ ポインター（**Dupuy pointer**）は，フレンチポインターとホイペットの混血で，体高は68センチにもなることがある。

オーベルニュ ポインター（**Auvergne pointer**）は，白地に，くすんだ青色の斑紋と斑点がある犬種である。

スパニエル　スパニエルとは《スペインのイヌ》という意味だが，中世以来，ヨーロッパに広く分布しており，スペインが原産地であるかどうかは明らかでない。どのスパニエルも，頭部は長くのび，ストップ〔注9〕ははっきり出ていて，吻（ふん）はまっすぐである。耳はたれて，しかも毛のふさがついている。四肢（しし）と尾にも，よく毛のふさがある。体高は35センチから65センチと，犬種個体によって差がある。

フレンチ スパニエル（**French spaniel**）は，イギリスのスパニエルにくらべると，だいぶタイプが違い，むしろセッターに似ている。褐色の斑紋のある白いイヌで，鳥獣犬としてすぐれた性能をそなえている。

ピカルディ スパニエル（**Picardy spaniel**）は，フレンチスパニエルの一変種で，とくに沼地での水禽猟に適している。ブルーの体毛に，褐色の長毛がまざっていて，長い耳には長い毛のふさがある。

ブリタニィ スパニエル（**Brittany spaniel**）は，たいていの場合，尾は短いか，あるいは

1　フレンチポインター。獲物を見つけた瞬間に片肢をあげ，尾を水平にしてポイントする。
PH. HOLMES LEBEL

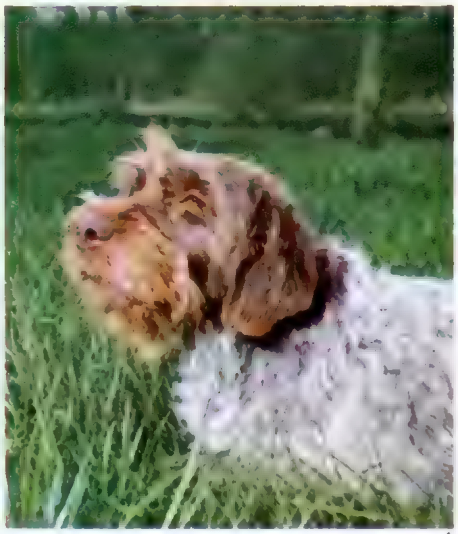
2　サンジェルマンポインター。フランスのポインターで，ポイントする直前。
PH. S. CHEVALLIER JACANA

3　オーベルニュポインター。 *PH. BUZZINI*
4　フレンチスパニエル。 *PH. BUZZINI*
5　グリフォン。灰褐色。 *PH. BUZZINI*

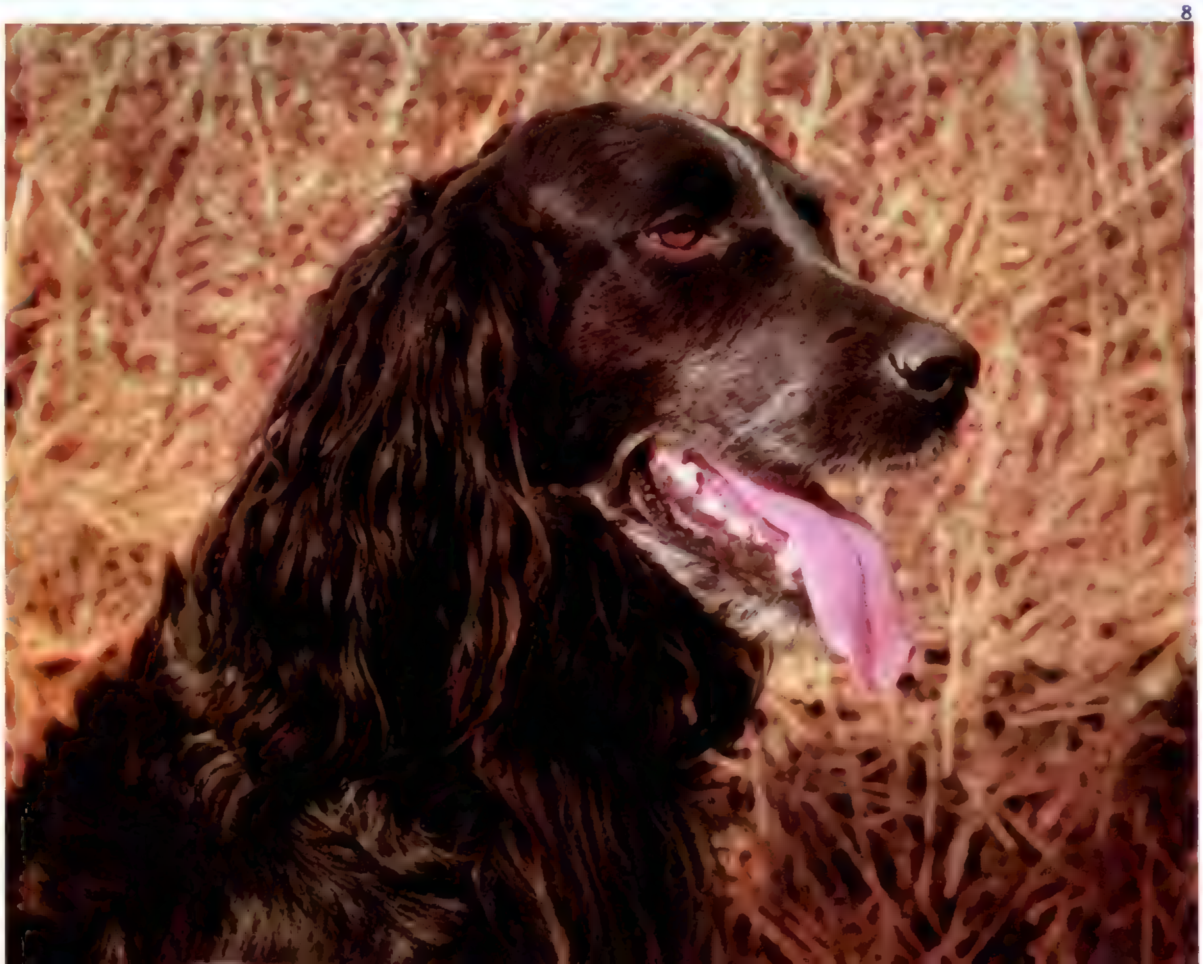

3


4


5


6


7

8


短く断尾しており，白い体毛に赤か，くり色の斑紋がついている。スパニエルとしては，ポイントをする珍しいイヌである。体高は50センチ以内である。

グリフォン　大きさといい，からだつきといい，フレンチポインターによく似て，毛はかたく，もしゃもしゃとした感じである。

バルベ（Barbet）というグリフォンは，たいへん古い時代からいるイヌで，ヒツジのような毛をもつ，フランスでムクイヌと呼ばれているようなイヌの祖先だと考えられている。嗅覚（きゅうかく）はそれほどでもないが，水に強く，また非常に勇敢である。

ブウル グリフォン（Boulet griffon）はバルベの直系の子孫だが，大幅に改良され，性質もよく，訓練しやすいが，狩猟犬としての役目は他のイヌにゆずっている。

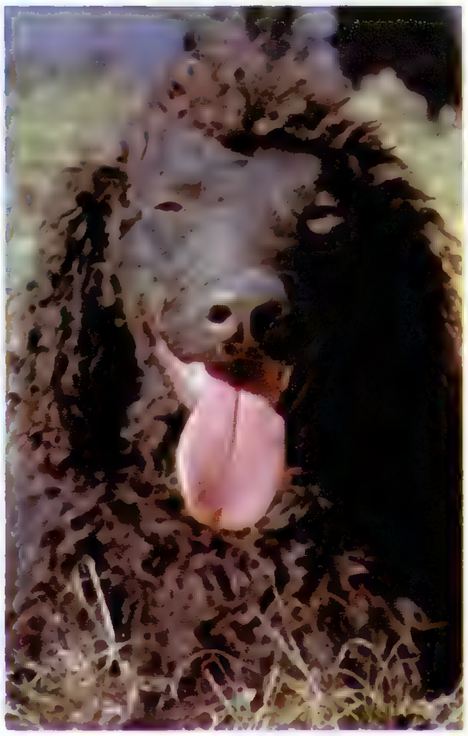
6　グリフォン。　*PH. BUZZINI*
7　ブリタニィスパニエル。*PH. Y. LANCEAU JACANA*
8　ピカルディスパニエル。フランスのピカルディ地方のスパニエル。　*PH. BUZZINI*



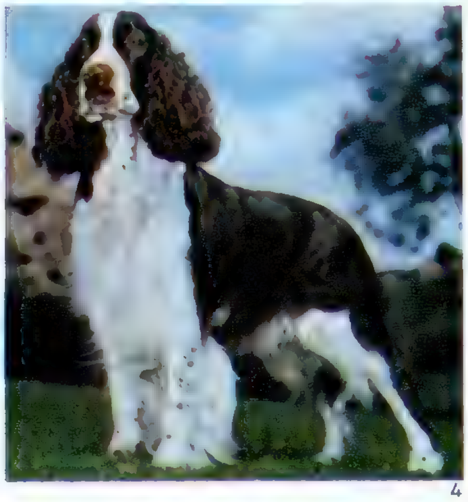
1



2



3



4



5

イギリスの指示犬

イングリッシュ　ポインター（English pointer）　18世紀のはじめ，イギリスの軍隊がスペインから移入したといわれているが，その後きびしい人為淘汰によって改良され，現在では指示犬の王者とされている。引き締まった姿をし，狩りにかけては，すばらしいセンスとバイタリティーをもっている。このイヌが獲物を追っているときの姿は，中段左の写真に見ることができる。体高70センチほど。

スパニエル　イギリスのスパニエルは，大きく２つに分けられる。すなわち，かわいた土地，いわゆるふつうの土地で狩りをするランドスパニエル（Land spaniels）と，沼地や水辺で狩りをするウオータースパニエル（Water spaniels）とである。ポインターにくらべて，獲物を見つけてから不動の姿勢をとるのが苦手なので，獲物を巣穴から狩りたてたり，ウサギを追いまわすのに使われている。

イングリッシュ　コッカー　スパニエル（English cocker spaniel）は，ヤマキジ猟をもっとも得意とする。利口で，温和，手ごろな大きさなので，家庭犬として広く飼われており，日本にも多い。毛は柔らかく，わずかに波打っている。色は赤，黄金色，黒などがある。

フィールド　スパニエル（Field spaniel）は，コッカーと同じ祖先から出たものと考えられるが，毛は黒っぽいものが多く，ちぢれていない。調和のとれた美しさをもち，アメリカで人気がある。体高は45センチ余り。

イングリッシュ　スプリンガー　スパニエル（English springer spaniel）は古いイギリスのスパニエルで，静かでしかも粘り強く獲物を捜すイヌとして知られている。白と黒の体毛がふつうで，体高は50センチ余り。

クランバー　スパニエル（Clumber spaniel）は，スパニエルのなかで，体高70センチ余り体重30キロともっとも大きく，ずんぐりして動作は鈍い。しかし，もの静かで，従順で，すぐれた感覚をもち，忍耐力もある。毛は白で，淡黄色の斑紋がある。

サセックス　スパニエル（Sussex spaniel）は，赤褐色の金属的なつやをした毛が特徴で，アイリッシュセッターよりも美しい。ほえながら獲物を追っていく。

イングリッシュ　ウオーター　スパニエル（English water spaniel）は，単独行動が好きなイヌで，どちらかというと鈍重だが，深い水のなかでもおくせずに獲物を持ってくる。

アイリッシュ　ウオーター　スパニエル（Irish water spaniel）は，特異な風貌をしているが，

1　イングリッシュコッカースパニエル。　PH. PRATO
2　イングリッシュポインター。　PH. P. JAHAN
3　アイリッシュウオータースパニエル。　PH. BUZZINI
4　イングリッシュスプリンガースパニエル。　PH. HOLMES-LEBEL
5　水鳥を追うスパニエル。　PH. HOLMES-LEBEL

イングリッシュセッター（白）とアイリッシュセッター（赤）。鳥獣猟用のイヌとして，またその姿の優美なものとして，世界的に知られている。
アイリッシュのほうが性質が温和で，毛の調子も好まれるため，より家庭犬となっている。（右）
PH. HOLMES LEBEL

フォックスハウンドの群れ。
飼い主とともに
キツネ狩りに出かける興奮の一瞬。
勢子イヌとしてのすぐれた嗅覚とスピードをもち
走る耐久力ではウマにも負けない。（31−10, 11）
PH. HOLMES LEBEL











1

顔をのぞいてはえているうずを巻いた毛が、からだに水をしみこませないのである。体高は57センチ余り。

セッター　大型のスパニエルであるといってよい。獲物を見つけるとセット〔伏せ〕して止まるところからセッターの名がある。スパニエルのなかにも、獲物を見つけると地面に伏せるものがあり、その流れをひいていると考えられる。

イングリッシュ セッター（English setter）は、とにかく姿の美しいイヌとして知られている。毛の色はさまざまだが、全身一色ではなくて、細かい斑があり、また、耳や尾、肢（あし）にはふさのような毛がついている。人間に対して忠実であるから、現在でも、ヨーロッパなどでは、狩りによく使われている。家庭犬として飼われているものも多い。

アイリッシュ セッター（Irish setter）は、イギリスの指示犬としてはもっとも古いものである。イングリッシュセッターにくらべて、からだの大きさはほぼ同じだが、よりすらりとしていて、豊かな赤い毛におおわれ、その優雅さは世界的に評価されている。そのために、家庭犬としても飼われるようになった。体高は63センチ余りである。

ゴードン セッター（Gordon setter）は、黒と赤い毛の色をした、重厚な感じのする指示犬で、沈着で忍耐強いのが特徴である。アイリッシュセッターにくらべてややからだが大きい。

レトリーバー　一般に指示犬は、撃たれた獲物を見つけにいくことよりも、まず狩りたてるのがその役目だが、レトリーバーは、撃たれた獲物を捜してくるのが得意である。現在の狩猟では指示犬はそれほど用いられなくなったが、レトリーバーだけは流行している。

ゴールデン レトリーバー（Golden retriever）は、名まえのとおり濃い黄金色をしており、美しい。その毛は水をしみこませないから、

ドイツポインター。
この犬の役割は獲物を狩りたてることにある。
しかし、また飼い主がしとめた獲物を
持ってくる仕事も果たす。（左）
PH. Y. LANCEAU -JACANA



2

水が好きなこのイヌにとって、つごうがよい。体高は60センチ余り。コーカサス産の牧羊犬と、ブラッドハウンドとの交配によるものと考えられている。

ラブラドール レトリーバー（Labrador retriever）は、カナダのニューファウンドランド島あたりで、漁師が浜べに釣り落とした魚を捕えさせるのに使っていた。のちにイギリスにはいって改良されたものである。どっしりとしたじょうぶなイヌで、毛は短く、密生しており、まっ黒が多いが、黄と焦げ茶というのもある。嗅覚（きゅうかく）がすぐれ、従順なので、警察犬や盲導犬としてたくさん使われている。体高60センチ、体重30キロといったところである。

フラットコーテッド レトリーバー（Flat-coated retriever）とは、毛がフラットにねているところから呼ばれるが、ラブラドールとセッターの交配からできたもので、黒または赤褐色をしている。体高は約57センチ。

カーリーコーテッド レトリーバー（Curly-coated retriever）は、カールした体毛をもっているのでこの名がある。フラット、カーリーはともに、ゴールデンやラブラドールにくらべるとスピードも嗅覚も劣っている。

チェッサピーク レトリーバー（Chesapeake bay retriever）は、レトリーバーのなかでいちばん大きく、体重は45キロもある。アメリカ系のイヌで、アメリカ北東部のチェッサピーク湾の冬のいてついた水のなかで、1日に200羽のカモをとるという、カモ猟にかけては他の追随を許さない。ラブラドールとオッター



3



4

1　ゴールデンレトリーバー。 *PH. Y. LANCEAU -JACANA*
2　ラブラドールレトリーバー。 *PH. BAVARIA SCHMIDT*
3　イングリッシュセッター。体毛の黒いもの。
撮影　小暮富夫
4　ゴードンセッター。 *PH. BUZZINI*



1



2



3

4



ハウンド（Otter-hound）との交配から生まれたもので，水のしみこまない毛と，水かきのようにひろがった指をもっている。

ドイツの指示犬

ドイツ ポインター（German pointer）
きわめて古い犬種で，祖先はスパニッシュ ポインターであろうと思われる。数十年前，アメリカやイギリスのポインターと交配され，現在のものになった。毛の色は白とくり色のぶち，あるいは白と黒のぶちが多く，その姿からはとぎすまされた刃物のような冴えを感じる。鳥猟にすぐれ，シカ狩りなどにも用いられ，ドイツらしい堅実な猟をするイヌである。体高は65センチまでである。なお，そのほかにもポインターには，ワイアヘアード，ラフヘアードのものがある。かつてワイマールポインターといわれたワイマラナー（Weimaraner）は，銀ねずみ色のすばらしい猟犬だ。

コッツヘルス（Korthals）　オランダのコッツヘルスという狩猟家が，1870年につくりだした指示犬グリフォンで，褐色の大きな斑紋のある毛並みが特徴的である。毛はとてもかたくて，さらさらしている。平地でもよく狩るが，沼地ではより元気が出る。

ムンスターランド スパニエル（Munsterland spaniel）　ブリタニィスパニエルに似ており，からだの色は白地に赤かくり色の斑紋で，からだの大きさもほぼ同じの体高50センチくらいである。よく獲物をもってくるイヌで，追跡犬として，何匹かを群れで使うこともある。もっと大型の犬種もあり，その体毛は白か黒である。

イタリアの指示犬

スピノーネ（Spinone）　体高65センチ，体重36キロといった大型で，どんな種類の猟にも向いているから，ハンターに評判のよいイヌである。色はくり色だが，白もいる。

イタリアン ポインター（Italian pointer）
このイヌは，あらゆるヨーロッパの指示犬の先祖であろうと考えられている。大型と小型があり，大型のものは体高70センチ，体重40キロにも達し，小型のものは，体高60センチ，体重28キロ以下である。毛の色はいずれも白地にオレンジ色の斑紋がある。

北ヨーロッパの指示犬

エルクハウンド（Elkhound）　スカンジナビア原産の大型犬で，もっとも古いイヌの1

1　ドイツポインター。イギリスのポインターにくらべて，どことなく渋みと気品がただよう。
PH. S.CHEVALLIER-JACANA

2　ムンスターランドスパニエル。
幾頭かを群れで使う狩猟犬である。
PH. Y. LANCEAU-JACANA



5

つである。石器時代の、このイヌの化石が発見されており、すでにその時代にイヌが家畜化されていたことを証明するかぎになった。ヘラジカを狩るが、攻撃はせず、絶えず近づいてほえつづけ、ヘラジカがイヌを追わなければならないような状態にして、飼い主のほうへ引きつれてくる。現在ではヘラジカ狩りは規制されているが、このイヌはよく飼われている。むっくりとした姿は北方犬型であり、秋田犬などとどこか通ずるところがある。

フィニッシュ スピッツ（Finnish spitz）

淡黄褐色の毛色、とがった吻（ふん）、よく動く耳、きびきびした動作などから、キツネに似ている。体高40～50センチとほどよい大きさ、鋭い嗅覚（きゅうかく）、粘り強さや、生まれつきのきれい好き、とフィンランド人たちが夢中になってほめるところである。北方犬型。

テ　リ　ア

テリア（Terrier）というと、あの小型の愛玩犬と思われるかたも多いだろうが、そもそもテリアという名まえは、ラテン語のテラ（terra）〔土を掘る〕からきたもので、本来、ほかの動物を地中の巣穴に襲って狩猟をするイヌである。地面を掘って、巣穴を見つけ、獲物を狩りだしたり、場合によってはみずからしとめてしまうこともある。

獲物としてはキツネやアナグマがいちばん多いが、キツネもアナグマもかなり強いから、それに対抗できるだけの力をもち、なおかつ、狭い巣穴の中にはいるので、体高は低くなければならない。筋肉組織も強く、あごに力があって獲物と巣穴の中で戦ってかみ殺すこともある。

尾は短いか、さもなければ断尾される。毛は短いものと、やや長いものとがあり、総じてこわい。ネズミなどの齧歯（げっし）類をとるのがうまいから、《ネズミをとるイヌ》とも呼ばれている〔注10〕。巣穴を捜す感覚と、忍耐がもっとも求められるが、それにこたえた活動的で精力的なイヌである。

テリアの原産地はイギリスだが、世界各国で変種がつくられ、テリアの種類はきわめて多いものになっている。それにともない、本来の狩猟犬から、巣穴の中にはいれないほどに大きくされたエアデールテリアや、小さすぎて獲物に対抗できない、といったものまでできている。

日本にも、戦前には日本テリアがいて、愛玩犬としてたくさん飼われていたが、戦後はまず見られなくなった。

テリアは、エアデールテリアをのぞいて、ほとんどが小型犬である。

3　エルクハウンド。
シカの狩りだしがうまい狩猟犬である。
PH. BUZZINI

4　コッツヘルス。オランダでつくられた。
水辺などでとくに活躍する。
PH. S. CHEVALLIER JACANA

5　ワイアヘアードフォックステリア。
イギリスでは現在でもキツネ狩りに使っている。
キツネの巣穴にはいって追いだすと、あとは
追跡犬であるフォックスハウンドの役目だ。
日本でも多く飼われているイヌの1つである。
撮影　小暮冨夫



1



2

イギリスのテリア

フォックス テリア(Fox terrier)　キツネ（fox）狩りに使われるテリアで，イギリスでは現在でもキツネ狩りの主役である。キツネ狩りは，フォックステリアが巣穴から追いだし，それを足の速いフォックスハウンドが飼い主のほうへ追ってくるのである。だから，巣穴にはいれるくらい小型で，しかも，追跡犬について走れるだけの力がなくてはならない。体高38センチ，体重９キロが最大である。白い毛に黒か焦げ茶の斑紋があるが，体毛の長くて，こわいものをワイアヘアードフォックステリア(Wire-haired fox terrier)といい，短いものをショートヘアードフォックステリア(Short-haired f.t.)，あるいはスムーズヘアードフォックステリア(Smooth haired f.t.)という。毛以外の特徴は同じである。

マンチェスター テリア(Manchester terrier)　これはブラックアンドタンテリアとホイペットとの交配からできたものと思われる。フォックステリアより大きいが，かなり弱々しく見え，ネズミとりイヌとして知られる。断耳〔注11〕を公式規格で禁じる以前は優美な姿だった。体高40センチ，体重７キロ余り。

トイ マンチェスター テリア(Toy Manchester terrier)　マンチェスターテリアの小型化した犬種である。体高25センチ，体重３キロにもかかわらず，実に勇敢で，自分と同じくらいの大きさのネズミ類に立ち向かっていく。

ブラック アンド タン テリア（Black and tan terrier）　黒と焦げ茶色のテリアというわけだが，口先はとがり，目はまるく，からだの引き締まった力の強いイヌである。耳は立っているものと，半分たれたものとがある。体高38センチ，体重９キロといったところだが，３キロに満たない変種もある。

ウエストハイランド ホワイト テリア(West-highland white terrier)　まっ白で小がらなスコットランド産のイヌで，耳と，尾が垂直に立っている。ケアンテリアの変種で，毛の色の違いをのぞけば大きさも性格も，よく似ている。愛玩犬として，評価はきわめて高い。体高27センチ，体重７，８キロほどである。

スカイ テリア(Skye terrier)　スコットランド北西部ヘブリジーズ諸島のスカイ島が原産地である。16世紀から19世紀にかけて，おそらくいちばんよく飼われたものだが，長い毛の手入れがめんどうで人気が落ちたといわれている。装飾犬だが，古くはアナグマ狩りなどに使われた。肢（あし）はバセットのように短く，体高は25センチしかないのに，体重が９キロと，からだの骨組みはがっしりしている。毛は，長いが巻いていなく，背中から左右にたれ下がっている。色は，灰青色だが淡黄褐色の場合もある。

ダンディ ディンモント テリア（Dandie Dinmont terrier）　作家ウォルター・スコットが，19世紀のはじめに出版した「ガイ・マナリング」という小説に登場する人物の名まえ

1　ショートヘアードフォックステリア。
イギリスでつくられたイヌで
からだの毛が短いところからこの名まえがある。
ワイアヘアードと同様にキツネ狩りに使われる。
PH. PRATO

2　ショートヘアードフォックステリア。
狩猟の成果はハンターの腕もさることながら
イヌの追いだし能力にかかっている。
PH. Y. LANCEAU-JACANA



3

をそのままイヌの名まえにした。このイヌはスコットランドの農夫がつくりだしたもので、狩猟犬、とくにネズミとりイヌとしてはすぐれている。丸い頭の上には、独特の花が咲いたようななめらかな乳白色の毛がついている。体高28センチ、体重6キロ余り。



4

スコッティッシュ テリア(Scottish terrier) スコッチテリア、あるいはスコッティと呼ばれて人気のあるイヌである。体毛は、黒のほかにも大理石模様あるいは淡黄褐色がある。元来キツネ猟犬で、そのずんぐりした胴体にくらべると頭部はたいへん長く、吻（ふん）には毛がたくさんはえている。尾は生まれつき短く、ぴんと上に立っている。観賞用として体形の変化が要求され、その結果分娩（ぶんべん）が困難になり始めている。体高25センチ、体重8、9キロ余り。

ボストン テリア（Boston terrier） アメリカ原産で、猟犬というよりも家庭犬である。のちに愛玩犬のところで述べよう。

ケアン テリア(Cairn terrier) スカイテリアと同じヘブリジーズ諸島の原産で、ボストンテリアとは反対に、典型的な猟犬である。岩穴や積み石の穴へはいりこみ、キツネ、テン、ヤマネコなどを追いだして捕えたので、ケアン〔積み石〕の名がついたという。愛玩用にするには、気性が激しすぎよう。毛の色は淡黄褐色で、黒のこともある。毛の色をのぞいて、ウエストハイランドとほとんど同じである。体高25センチ、体重7キロほど。

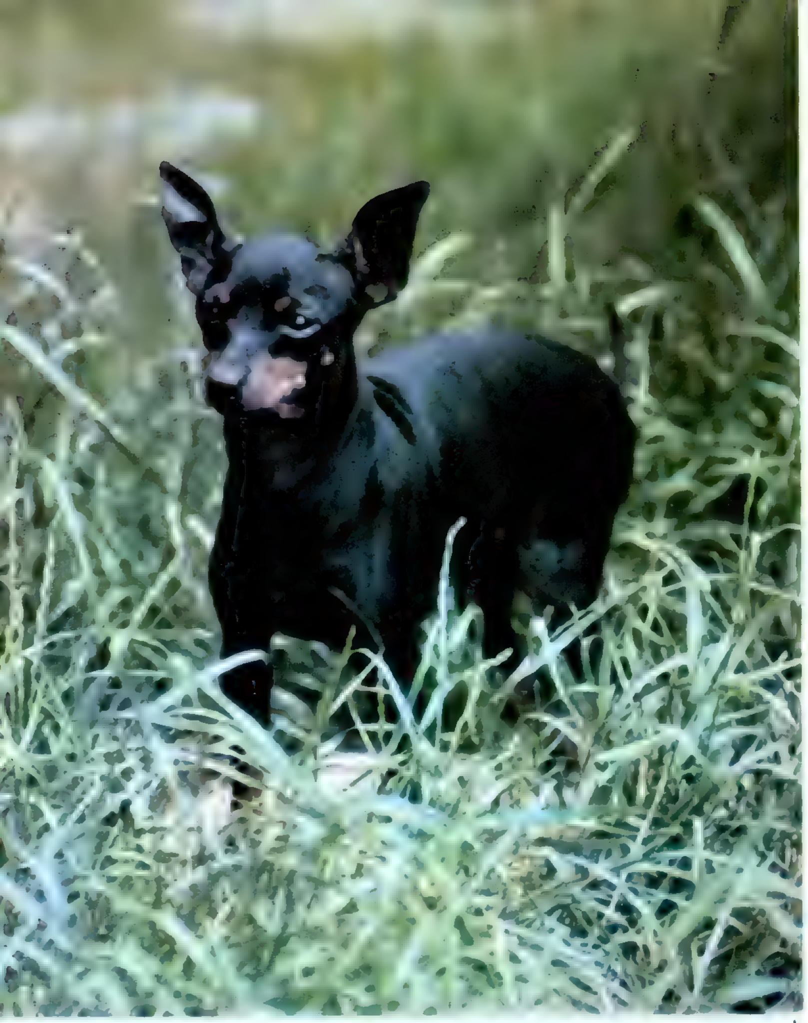


5

ヨークシャー テリア（Yorkshire terrier） テリアのなかでもっとも小さく、体高20センチ、体重3キロ余り。愛玩犬のところで述べる。

3 ダンディディンモントテリア。
頭の毛が珍しい。 PH. PRATO
4 スカイテリア。
うっとうしいほど長い毛は、見る人をかえってユーモラスな感じに誘う。 PH. PRENZEL PRESS

5 スコッティッシュテリア。
スコッチテリアの名で親しまれている。
日本では愛玩用としてたくさん飼われているが
やはり狩猟用なのである。 撮影 小暮富夫



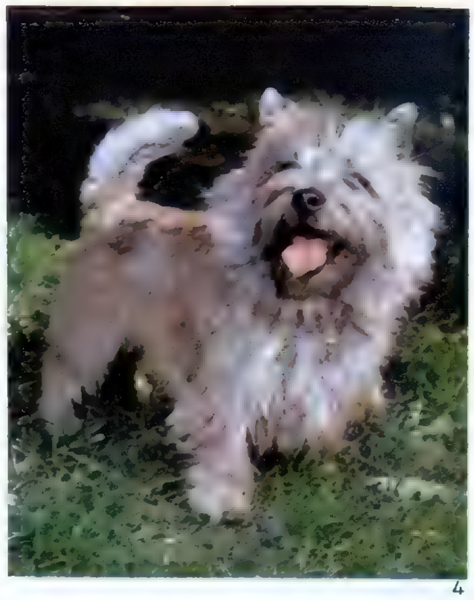
1



2



3



4

エアデール テリア（Airedale terrier） イギリスのヨークシャー地方，エア渓谷（Aire dale）が原産で，《テリアの王様》と呼ばれている。まさにその呼称にふさわしく，テリアのなかでもっとも大きく，また，狩猟犬として，警察・軍用犬として，さらに番犬，愛玩犬として，あらゆる目的に使える《万能犬》である。体高60センチ，体重22キロ余り，毛はかたく密で，からだの部分は灰色か，黒っぽく，肢（あし）は焦げ茶である。

レークランド テリア（Lakeland terrier） むかしはイングランド北部でフォックスハウンドの群れといっしょに狩りをしていた。第二次大戦後に基礎の固まったイヌで，じょうぶで，しかも体高35センチ，体重７キロ余りという手ごろなサイズ。性格は善良で，表情が豊かなために，家庭犬としての改良が重ねられている。

ウェルシュ テリア（Welsh terrier） ウェールズのテリアで，エアデールとレークランドの中間くらいの大きさで，しかも，この２つのイヌによく似ている。ともに，古いブラックアンドタンテリアの子孫であろう。頭部が長く，頭蓋（ずがい）は平らで，ストップは事実上ない。活動的で，耐久力に恵まれている。毛はこわく，色は，黒と焦げ茶，または灰と焦げ茶。体高39センチ，体重８，９キロ。

シーリハム テリア（Sealyham terrier） ウォールズの村の名まえをつけたこのテリアは，1850年ころにイギリス海軍の大佐によってつくられた。ケナガイタチをはじめ，あらゆる動物に立ち向かえる勇敢さを求めて淘汰されたものだが，どんな犬種からつくりだされたかは明らかではない。短肢で小型なので，穴から動物を追いたてるのにちょうほうであり，また，ほえる声も大きい。白くてやや長めの毛は，頭以外に斑点がないことになっている。体高25センチ以下，体重９キロ以下である。

ベッドリントン テリア（Bedlington terrier） イングランドのノーサンバーランドが原産地で，テリアのなかでもっとも古い犬種の１つである。ほかのどのテリアとも似ていないが，とくに異なる点は，ダンディディンモントのように，頭に白い絹糸みたいな頂毛があることと，たれた長い耳をもっていることである。肢は長くて細く，被毛はヒツジのようで少しカールしている。耳の先には飾り毛がついている。体高40センチ，体重８～10キロ。

ブル テリア（Bull terrier） 新しい闘犬種を得ようと，雄ウシ（bull）と戦わさせていた雑種のテリアと，ブルドッグとを交配したものである。利口で，闘争心に富み，すばらしい勇気と決断力をもっている。ストップのない頭部は卵のようだが，からだは筋肉がよく発達し，首が太い。尾は長く水平にのびている。体毛は短くてつやがあり，だいたい白だが，黒斑のあるのもいる。体高60センチまでだが，小型もあって，それは体高35センチ，体重10キロ以下である。現在では闘犬競技がないので番犬として使われる。

ボーダー テリア（Border terrier） スコットランドとイングランドとのボーダー（境界）地方のイヌで，たくましい猟犬であるとともに，ふだんは農家の番犬として働いている。テリアの元祖ともいうべきで，そのことは，洗練されていない姿にもあらわれている。頭部はカワウソそっくりだが，体毛はきつね色，淡黄褐色，灰色と焦げ茶，青と焦げ茶などである。体高30センチ，体重７キロほど。

ノリッジ テリア（Norwich terrier）と**ノーフォーク テリア**（Norfolk terrier） イングランド東部，ノーフォーク州の首都がノリッジである。この２つのイヌは，ノリッジの耳が立ち，ノーフォークがたれている〔注12〕ことをのぞいては同じである。小がらで，ずんぐりしており，肢（あし）が短く，アナグマなどの狩猟目的につくられた。断尾され，体毛はかたくてねており，赤っぽいもの，黒と黄褐色など。体高28センチ余り，体重５，６キロ。

ソフトコーテッド ホイートン テリア（Soft-coated wheaten terrier） アイルランド産のテリアの古いもので，長い毛が柔らかくカールしており，体毛が濃いこむぎ色をしているのでこの名がある。体高50センチ，体重20キロほどである。

1 トイマンチェスターテリア。
愛玩犬としても親しまれている。小型の動物とくにネズミなどをつかまえる。 *PH. B. LOSIER*

2 シーリハムテリア。
これもテリアだがすっかり肢が短くなっている。白いからだに斑点がないものがよい。 *PH. BUZZINI*

3 ベッドリントンテリア。
ぬいぐるみのような奇妙な顔をしたこのイヌもテリアの古い型の１つである。*PH. PRENZEL PRESS*

4 ケアンテリア。
小さなからだだが，その狩猟犬としての気迫は激しいものがある。 *PH. BUZZINI*



5



6



7



8



9

アイリッシュ　テリア（Irish terrier）　ワイアヘアードフォックステリアを赤毛にするとこのイヌによく似てくるが，それより少し大きい。人間にはいいが，他のイヌにはけんかをふっかける。これはテリア共通の欠点でもあるが，そのために闘犬に使われていたこともあった。そのころは《赤い悪魔》といわれていた。体高45センチ余り。

ケリー　ブルー　テリア（Kerry blue terrier）　アイルランド産の大きなテリアで，ケリー州で飼育され，猟，牧羊，ネズミ狩りと，万能犬である。体毛は長く，柔らかくしかもやや巻いている。色は銀ねずみか青である。体高45センチ，体重17キロほどである。

オーストラリアン　テリア（Australian terrier）　オーストラリア原産で，姿はケアンテリアを思わせる。猟用テリアとしては体高25センチ，体重5キロほどともっとも小さいものに属するが，活動的である。

ドイツのテリア

ヤークト　テリア（Jagdt terrier）　全体の姿はウェルシュテリアに似ている。長く細い頭部，中高の頭蓋（ずがい），ほとんど目だたないストップをもった力強いイヌである。三角にとがった耳は，フォックステリアのように先端がたれている。毛色は何色でもかまわない。

ダックスブラッケ（Dachsbracke）　ダックスフントに似ているが，からだははるかに大きく，体高42センチもあるからどんな地形のところでも狩りができる。頭蓋には，外からでもわかるみぞがあり，耳は平たくて，長く幅も広い。毛は太くて柔らかいのが密生しているが，胴と頭では短い。色は一般に黒と焦げ茶である。

ダックスフント　肢（あし）が短いために小さなイヌのように思われているが，実際は肢をのぞけばふつうのバセットと同じ大きさである。こうした異常な格好は，突然変異によるものだが，そのスタイルは注意深く維持（いじ）されてきたのである。このイヌは，地下の巣穴でキツネ，カワウソ，アナグマ（Dachs）などを狩る猟犬（Hund）なので，ダックスフントの名まえがあり，また，一種のテリアともみなされている。6つの犬種がある。

ショートヘアード ダックスフント（Short-haired dachshund）は，毛が短く，密で，光沢（こうたく）

5　ヨークシャーテリア。
ヨーキーという名で親しまれている。テリアの仲間ではもっとも小さい。　*PH. PRENZEL PRESS*

6　ブルテリア。
雄ウシと戦わせるためのテリアを祖先にもつ。きわめて闘争心に富んでいる。　*PH. S. A. THOMPSON*

7　ウェルシュテリア。
エアデールによく似た姿は美しい。活動的で耐久力に富んでいる。　*PH. BUZZINI*

8　ケリーブルーテリア。
牧羊犬としても，狩猟犬としてもすぐれた万能犬である。　*PH. PRATO*

9　エアデールテリア。
日本でもかなり親しまれているが，狩猟犬である。《テリアの王様》といわれるほど，その性格も狩猟をする能力も，また姿もすぐれている。　*PH. PRENZEL PRESS*



1



3



4



2

があり，ちぢれていない。色の規格は白以外ならなんでもよく，多いのは淡黄褐色のもの，黒と焦げ茶のものである。からだはできるだけ胴長で，しかも低くなければならない。そのうえ四肢（しし）は短く，頭部は細いことが要求される。体重約７キロである。

ロングヘアード ダックスフント（**Long-haired dachshund**）のもっている柔らかく，光沢のある，軽く波打っている絹のような長い毛は，アイリッシュセッターの毛に似ている。

ワイアヘアード ダックスフント（**Wire-haired dachshund**）は，前の２つのダックスフントにくらべて，まだ，はなばなしい流行をつくったことがない。毛はかたく，密で，吻（ふん）には濃い口ひげがあり，まゆも濃い。

それぞれの毛のダックスフントに，それぞれ小型の変種がある。それらは標準型と同じ色をもっていて，かつては，アナグマ狩りに用いられたものである。現在では家庭犬として人気がある。ミニアチュアダックスフント（**Miniature dachshund**）は，体重５キロ以下。

1　ショートヘアードダックスフント（左）とロングヘアードダックスフント。　*PH. E. P. S.*
2　ショートヘアードダックスフントの赤色。　撮影　小暮富夫
3　ワイアヘアードダックスフント。　*PH. BUZZINI*
4　ヤークトテリア。　*PH. BUZZINI*

イヌの東西交渉
―アジアのイヌ―

内田　亨

今から1000年以上もむかし，ペルシャをウマ，あるいはラクダの背に乗って出発した1個のルリ碗があった。シルクロードを東に向かって中国(唐)にはいり，それから海を渡って長い旅のすえに日本に着いた。それは正倉院の御物として，今もなお1000年の光をたたえている。

そのルリ碗が通った道を，イヌもまた西から東へ，あるいは，東から西へと越えていった。

古代エジプトの遺跡には，体高の高いグレーハウンドに近いものや，強そうな番犬型，また，耳は立っているがダックスフントのように肢（あし）の短いものなどが描かれている。アッシリアの壁画などでも，マスティフのようなモロッソ犬型が戦争に使われたことがわかる。

一方中国でも，漢時代以降の画や陶器をみると，すでに大型の番犬型の吠犬といわれるイヌ，狩り犬といい，細狗とも風犬ともいわれたグレーハウンド型，耳のたれた狩猟犬型といったイヌがいたことがわかる。ほかに食犬といって食用のイヌが報告されているが，とにかく，ヨーロッパと同じようなイヌが2000年余りもむかしに，すでに存在していたということになる。



〈漢代のイヌ〉　灰陶・加彩　京都・藤井有鄰館蔵　写真・小西晴美

古来から共通犬種がいた

東洋では，大型犬，中型犬はおもに街犬（ストリート・ドッグ）として放し飼いにされていたから，交配も自由であるかわりに，純粋種も意識的にはつくられなかったと思われる。小型犬は，ヨーロッパではギリシャ時代から飼育されていたが，中国でも土着のイヌがおり『説文』によれば《猈》という名のこのイヌは，匈奴地におり，巨口にして黒身，吻（ふん）がつまって，『説文長箋』では肢が短いことをつけ加えている。

コリエ Collier は中国の絵画や陶器から，イヌについての本を書いているが，それによると，地中海のマルタ島に産した小型犬が，ギリシャ本土に渡って現在のマルチーズかそれに近いものとなり，イタリアへいってそれから東ローマを経てシルクロードを東へ唐の長安に着いたとあるが，それは確かであろう。というのも，唐よりも前の時代，六朝のとき，北朝の北斉の王，緯が波斯狗を，赤虎と名づけ愛し，馬上でも抱いていたと記録されている。波斯狗は小型犬で，立耳で吻がとがり，短い肢をした，おそらくイラン地方から輸入されたものだろう。

唐の初代の高祖の時代に，東トルキスタンの高昌国（トルファン）の王，文泰が雌雄1匹ずつのイヌを高祖に献じた記事が『舊唐通典』に出ている。体高が中国尺の6寸，体長1尺余と小さいが，性甚だ慧く，よく馬を曳き，燭を銜む，とあるところをみると，当時，イヌにウマの口とりをさせ，夜になると殿中では燭をくわえさせて高祖の行く手を照らさせたのだろう。このイヌは，小アジア，中アジアのシリア辺に及ぶ東ローマ帝国のアジア大陸における領土であった拂菻国（現在のトルコ西部，アナトリア地方）に産したものといわれている。

楊貴妃のイヌ

また，玄宗皇帝にもイヌの話がある。唐時代のことを書いた随筆『酉陽雑俎』にあり，天宝年間の夏のある日，親王と将棋をさしており，側で賀懐智に琵琶をひかせていた。楊貴妃はその将棋を見ていたが，形勢は皇帝のほうが不利だった。楊貴妃が康国産の猧子（小狗）を放したところ，盤の上にのぼって駒を乱してしまったが，皇帝は大いに喜んだとしている。猧子とはサルだともいわれるが，サルは便のしまつが悪く宮中で放し飼いするのは困難と思われるから，チン（狆）のような小型犬と解したい。康国とは，中央アジア，ウズベク共和国のサマルカンドである。サマルカンドはシルクロードの重要な都市であった。

このようにみてくると，マルチーズと思われるような小型犬が中国にはいった道は，東ローマ，拂菻，ペルシャ，サマルカンド，トルファン，長安というシルクロードであったことは確かである。



〈チンを抱く美少女〉　唐時代　加彩　京都・白沙村荘蔵　写真・小西晴美

唐が滅亡して，五代の乱ののちに宋の時代となると，蜀が小狗の産地となって，羅江狗とか羅江犬というのが有名となる。あるいは桃花狗，桃花犬とも呼ばれた。宋の太宗は名君だが，非常な愛犬家ともいわれ，淳化年間に蜀の合州から羅江犬を得た。このイヌは，たいへん小さくて性質は利口で，つねに帝の側におり，帝が庭を散歩する道をよく知っていた。朝廷で集まりが開かれるとき「珠簾イマダ巻カズ扇（とびら）イマダ開カレザルニ，桃花（イヌの名）尾ヲ搖カシテ常ニ先ズ至ル」と，帝の現われるのを知らせるので，一同はイヌの動作を見て

――→ *

カラーページ注

〔注1〕 **グレーハウンド型犬**　ウサギ猟犬ともいい，家犬の一亜種として，*Camis familiaris grajus* のなかに入れられている。世界各地の砂漠地帯に発生したものであり，エジプト，スペイン，ゴビ砂漠などが知られ，古代中国では，細狗または風犬と呼ばれていた。ドイツでは Wind hound （風犬）と呼ぶので，偶然の東西一致である。この犬種のなかで，コーカサスやアフガニスタンの山地の寒いところに生息するものでは，長毛のボルゾイ，アフガンなどになっている。この犬種は嗅覚(きゅうかく)がわりあい鈍く，視覚がよく発達している。狩りのほかドッグレースにも用いられる。

〔注2〕 **家庭犬**　使用目的によるイヌの分け方がたいへんあいまいであることは本文に述べたが，家庭犬というのもあいまいで，家の中，あるいは庭でペットとして，番犬として飼っている状態一般をいう。ほかに装飾犬，観賞犬，同伴犬といった言い方も出てくるが，厳格に言い分けるのはむずかしい。ヨーロッパなどでは使い分けられていて，装飾犬は，宝石やバッグなどと同じようにアクセサリーの一部と考えて，洋服の色に合わせて連れて歩く。同伴犬は連れて歩くのが目的で，やはり装飾とするが，若い婦人は大型犬を連れている場合が多い。観賞犬は，家庭犬と同じだが，おもに家の中においている。必ずしも小型犬ではない。

〔注3〕 **獲物のつかまえ方**　イヌは一般に嗅覚がすぐれているが，グレーハウンド型は例外として視覚がすぐれているので，獲物を視覚で追いかける。体重が軽く，四肢が長く速力も早いので，ウサギを追いかけまわし，ウサギが逃げ疲れたところをつかまえる。

〔注4〕 **体高・体重**　イヌの体高は地面から，人間でいえば肩甲骨に当たる鬐甲（きこう）までをはかる。動物のからだの大きさを示す場合，体長でいうわけだが，イヌだけは，意図的に肢を短くし，背を低くしたりしているので，変化の大きい体高をもって基準としている。犬種は，国際畜犬連盟あるいは，この連盟で公認されていない場合は各犬種の連盟で一定の規格を定めている。すなわち，体高，体重，毛ぶき，色，耳，尾，そのほかなどで，その規格に合わないものは犬種として失格となる。

〔注5〕 **自国のイヌ**　民族は，自分の発祥の地にできたイヌを尊ぶ傾向がある。それは必ずしもそのイヌの客観的な評価と一致しない場合もある。かつての満族の袖犬などがそれであり，またサモイド，エスキモー犬など民族と同じ名をもつ犬種もある。

〔注6〕 **追跡犬**　追跡犬と，次の指示犬のなかに分類されている犬種は，主として猟犬型 *Canis familiaris intermedius* に属し，たれ耳がある。

〔注7〕 **ブラッドハウンド**　この大型のイヌは，ここでは狩猟犬に入れるが，マスティフなどと同じように番犬に入れられることも多い。

〔注8〕 **断尾**　尾の貧弱なものは，美観上から，生まれるとすぐに尾を切るものがある。これは犬種の規格にきまっていることで，ドーベルマンピンシェル，エアデールテリアなどがそうである。

〔注9〕 **ストップ**　鼻すじのことで，少し高くなっているところ。犬種によりストップのぐあいで横顔のよさが出る。

〔注10〕 **ネズミをとるイヌ**　とくに訓練しないが，小型犬ではネズミをとるものが多い。日本犬の中型，小型のものもまた，野ネズミをとるものが多かった。

〔注11〕 **断耳**　美観のため，幼時に耳の一部を切りとることで，断尾と同じで規格によってきまっている。一般にあまりしないが，ドーベルマンピンシェルなどはする。たれ耳を立てる目的もある。

〔注12〕 **立耳とたれ耳**　イヌは，本来オオカミやキツネのように立耳だが，飼われるようになって耳の筋肉が退化し，たれたものがある。機能的には，両者はほとんど差はない。■　（内田　亨）

ヒグマと2人のイノシシ 29

夢の超特急

畑　正憲

「兄貴，やってくれよ」
「ああ」
「こちらは大丈夫だから」
「……うん」
「人間の体力には限度というものがあるぞ。3日だけどんべえの顔を見ないで過ごせよ」
「ああ」

僕は始終煮え切らぬ返事をした。

どんべえをわが家に引き取って以来，僕たちはその側につきっきりになっていた。文字通り寝食を共にし，一刻も早く共同生活の形をつくりだそうとしていた。

どんべえが僕たちの皮膚を咬み破らないようになったことは，その努力が一応稔ったと考えてよかった。体重は約18キロ。上川で受け取った時の3倍近くにもなっていたが，精神的にはまだ赤ん坊と同じで，自分本位の生きる意志のかたまりである。それでも，置かれた環境に順応しようという努力はするようになっていた。弟がもう大丈夫だと言ったのは，その点を指している。

「やってくれよ」

と，僕を追い出しにかかったのは，他でもない。ひとまず霧多布の家に落ち着いて，原稿を書けとすすめているのである。

北海道へくるまでの僕は比較的遅筆な方で，カーテンと雨戸を閉めて暗室と化した書斎で，3日も4日もかからねば短い文章を仕上げることが出来なかった。けれども，どんべえと付き合い始めてからは，そういう贅沢は許されなかった。彼女がすこやかな寝息をたて始めた瞬間，紙に向かって貯まっているものを吐き出さねばならぬ。ためらっている余裕は，まったくと言っていいほどなかった。

それにしても時間が足りぬ。どんべえの目醒めは背伸びに始まり，長い舌を思いっ切り前に伸ばし，しばらく前後左右に遊ばせ，それから大きなあくびをする——その動作が僕にはうらめしかった。

書きたい。書いて書いて書きまくりたい。ひとりだけの密室で。

裏からセミの声がしみこんでくる広いひんやりした部屋の中央に大きな机を置き，部厚な座蒲団の上にどっかりと坐り，糊がきいた浴衣を着て，1行ずつ小説が書けたら。どんべえを抱いて眠る暗い夜，ふと目醒めた僕はそういう光景を何度も何度も頭に描いた。

いや，それはないものねだりである。立ってでも逆立ちしてでもいい，たっぷり24時間，紙の上に字を書いておれたら……。

その気持を家族がわからぬわけがない。彼らは何とかして僕をどんべえから引き離し，3日間だけ霧多布へ送りこもうとしていた。

3日の休暇——。

僕にはそういう感じだったが，本当はそれどころじゃなかった。3日の間，根を詰めて仕事に精を出さねば，約束していた仕事が大幅に遅れてしまうのである。そうなれば資金がとだえ，もろもろの計画が根底から崩れてしまう。

「何をグズグズしているのよ」

と，妻がそっけなく言った。

「早く行って仕事をしてくれなくちゃ，こちとらオマンマの食いあげじゃない」
「……」



弟の三喜雄さんも，どんべえと寝食をともにして，めんどうをみてきたのだったが……

＊ ——→

粛然となった。

この桃花については，『古今詩話』に有名な詩がのっており，それによると，帝の没後，元気衰えてものを食べず，帝の葬式の列には加わったがまもなく死んだ。そこで帝の陵に葬ったとある。

日本にはいったイヌ

日本への小型犬（小狗）の渡来は，聖武天皇の天平4（732）年に，新羅から蜀狗1匹が記録されており，次は淳和天皇の天長元（824）年に渤海国から大狗2匹のほかにチンが2匹，越前（福井）経由で輸入されており，寛平2（890）年宇多天皇のときに呉国から拂菻狗が2匹輸入されたという記録がある。これらの小狗は，蜀狗，狎子，拂菻狗などとなっていて，その犬種はわからないが，小型のペット犬であったろう。

中国では，南宋の時代から，長毛の小型犬，獅犬の記録が見えているが，獅犬，あるいは獅子犬，金連狗，金糸狗，金毛狎狗などと呼ばれるイヌがひろまったのは，元が国家を統一して，チベットの首都ラサを占領してからであると考えられている。このようにたくさんの名称がついているのは，毛色が黄あるいは褐色であり，長毛であるからで，これらが現在のラサテリアの原種ではないかといわれている。この小狗はチベット王宮でも飼われていた。

特徴は，毛が長く，吻は細く，耳は小さく立っていて，目は大きく，肢は短い。ヨーロッパにライオンドッグ（liondog 獅子犬）が知られていたのは17世紀はじめで，リンネやビュッフォンなどの生物学者は18世紀にライオンドッグについて書いている。このイヌは東洋から輸入したものかもしれない。

北京チン全盛期

明の時代には，宮中ではネコを飼育しチンを飼うことはなかった。しかし，清になると，国力のもっとも充実した康熙・乾隆両帝の時代には，北京チン（狆）が多数宮中で飼育されるようになった。この時代にチンがヨーロッパに輸入され，ペキニーズ（Pekinese）となり，日本に輸入されたものは日本チン（Japanese spaniel）のもとになった。

北京チンは，清朝の宣宗すなわち道光帝のときに後宮で非常にたくさん飼われ，このために数千人の宦官が飼育に当たったという。そこで，チンの毛色と毛の長さに変化が出てくるようになった。

また，清末期の西太后は，北京チンを飼育するとともに，交配によって相称的に斑を出したり，額に大きな白斑を出したり，背に鞍掛斑を出したりした。また，西太后は袖犬という小さい犬が，満族の故郷である東北部起源であるとしてたいせつに育てたそうである。西太后がイヌ小屋をたずねると，イヌは，一列に並んで，後肢で立ちあがり，前肢をあわせて西太后を拝むようすをするように訓練されていたという。これらのチンは，清朝瓦解ののちには，宦官のために都内に持ちだされ，売買され，散失してしまったそうである。現在の中国ではイヌの姿はほとんど見られないという。

純血種は暑さに弱い

中国以外のアジアでは，ニューギニア島の黒地に白斑のあるパプア犬が知られており，太平洋諸島に広く分布していたものらしい。台湾の高砂犬などもこれに属すると思われる。これらは，元来，半野生であり，南洋諸島では食用となることが多かった。また極地方には，エスキモー犬，ライカ犬，サモイドなどが古くから分布していた。これら極地方のイヌにはオオカミの血がはいっているという説もあるが，確かではない。ただ，これらの犬種は，冬の間そりを引いたりするが，夏は放し飼いにされて純粋なものが少ないといったことで，オオカミとの混血もいわれるのだろう。

このように，イヌの分布から見ると，イヌは寒帯，温帯，熱帯と，ほとんどすべてにいる。しかし，現在の状況はイヌの生活にとって必ずしもよくない。というのは，北方都市では，食べ残しを捨てずにまとめて焼却してしまい，そのうえ，冬の寒さをしのぐ場所も，近代都市は与えてくれない。北ヨーロッパなどの都市には街犬はほとんど見られないが，イタリア，ギリシャになるとわずかだが目につき，東洋の暖かい都市では多い。

純粋種といわれるものは，ヨーロッパでつくられたものがほとんどのため，寒さに強いが暑さに弱いから，日本の夏などは暑すぎるのである。しかし，ヨーロッパでつくりだされたものにイギリスのマスティフなどの短毛もあり，アジア系統のものをイギリスの気候に馴化させたのだろうと思われる。中国の文献によれば，アフガニスタンや中国南部にはたれ耳の短吻のマスティフ型の大型犬がいたとある。またモロッソ型のイヌは熱帯に発生したと思われるし，寒いところなので長毛であるチベッタンマスティフ，中国に広く分布していたパリア犬のうちで食用となったチャウチャウなど，アジアのイヌの多くが，ヨーロッパの現在の犬種になんらかの影響を与えている。■

「行きなさいよ，早く。もう咬まれたってたかがしれているから」

「大丈夫かな」

「何言ってるのよ。これでも動物をたくさん育ててきたのだから。それに機関長がいるから，あなたがいるよりよっぽど心強いわ」

とはいえ，僕の心配が軽くなるわけがなかった。島に住んでいるのだから，いつ何時物資が不足するかわからない。そんな時，弟が舟を出したら，島には妻と娘がどんべえと残ることになる。それで果たして大丈夫だろうか。

それから3日ほど悩んだ揚句，どうにもならなくなって，僕はしばらく霧多布へとじこもることにした。

どんべえの体調に異変のきざしが現われたのは，僕が島を離れた翌日のことだった。物資の補給に弟がやってきたのが，何となく顔色がさえない。

「どうした，何が起こったのだ」

と僕。

「それが……」

と，弟は口ごもった。

「どんべえだな。またとんでもないわるさをしたのか」

「でもないけど」

「そんなら何だ，はっきり言ってくれよ，まさか病気では」

「それだよ」

「ほう」

「昨夜から下痢がひどくって，ちょっと眠ってはジャーだろう，一睡も出来なくて弱ったよ」

「下痢？」

「そうだよ，あの調子ではくたばるかもしれない」

「まさか……」

クマは強い動物だという自信が僕にはあった。動物についてさほど知識のない人でも，殺さずに飼育した例は多い。折角ここまで育てたのに，下痢位で殺してたまるものか。

そこで僕は提案した。

「よし，思いきって薬を使ってみよう。どんべえの体重なら，小学校の1,2年生の分量を飲ませていいだろう。ミルクに混ぜるか，イヌやネコの要領で口の奥へ押しこんで，もようをみてくれ」

「飲ませて平気かな」

「平気，平気。たぶんそれでピッタリとまると思うけど」

ところが，下痢はそれほど生易しいものじゃなかった。そのまた翌日現われた弟の表情には，どす黒い疲労のかげりがあった。

「ダメだったか」

「全然」

「ダメなのか」

「ああ」

「そいつはおかしいな。あの整腸剤を飲ませても，水のような便が出るのか」

「出るなんてものじゃない。オシッコのような透明な液体のたれ流しだ。それにクマの場合，口の中に入れて薬を飲ませるわけにはいかないぞ。かなり奥へ入れても，のどをヒックヒックさせて吐き出してしまう」

動物がものを呑みこむ行動は，いくつかにわけられる。口の前半は味わって自発的に中へ送りこむ働きをするが，舌のつけ根辺りから奥へ食物が触れると，自動的に呑みこむ運動が起こる。それを利用して，イヌやネコには薬を飲ませるのである。実際には，薬をオブラートなどで包み，表面をなめてすべりやすくし，指先でぐっと口の中へさしこんでやればいい。だがクマは，奥の奥までさしこんでも吐き出してしまうという。だから弟は，僕が指示した分量をミルクに混ぜて与えたそうだ。

——薬がきかないわけがない。

と，僕は頭をひねった。



船の上から振り返ると，畑さんの家は，島の横腹に小さく寂しげに見えた

口から食べたものを何時間で排出するか，すでに僕はチェックして置いた。これは僕の得意な方法であるが，体が透明な動物なら，食紅で食品を染めてやれば，胃から腸へと送られていくようすさえ確かめることが出来る。どんべえの場合なら，ミカンのカンヅメが測定に役立った。彼女はミカンが好きで，カンヅメ1つ位ペロリと平らげるが，まだ消化する能力はないらしく，1つ1つ離れた細胞がそのままの姿で便に出てきた。それをフォローして置けば，どの位で食品がどんべえの体内を通過するか，量的にも追うことが出来たのである。

きっと腸を通過する時間が短くなったに違いないぞ。

そう思うと原稿どころではなかった。僕は島へ舟を走らせ，どんべえにミカンのカンヅメを与えてみた。

するとどうだ。1時間も経たぬうちに，ミカンのはしりが現われたのである。

「ウム。夢の超特急だ」

僕はそううめいて腕を組んだ。■

動物渡来記　4

ダチョウと混同されたヒクイドリ

上野益三

飛べない大鳥，しかも，頭部から頸部へかけての奇異な形態と青，だいだい色や深紅の華麗な色彩，それときわだったコントラストの黒くてこわい羽毛，ツルやコウノトリより大きい鳥を知らない日本人が，ヒクイドリを驚異の目で迎えたのは当然であった。しかも，この鳥は，食物の消化を助けるために小石をのみこむ習性があり，火まで食べてしまうというので評判になった。おそらく，燃えがらの堅炭を小石とともに食べるという，いかもの食いぶりを見た結果であろう。このような大鳥ヒクイドリが，オランダの貿易船によってはじめて渡来したのは，寛文3（1663）年だといわれる。そののちも，たびたび持ち渡られたが，ダチョウと混同されたらしい。

ヒクイドリの分布地域は，ニューギニアならびその近隣の島々で，オーストラリアの北東部クイーンスランド地方にもいる。それらは，およそ3つの大きいグループに分けられる。ここに載せた図は，ヒクイドリ属中のもっとも普通種で，その大きい角質の頭冠，胸にたれた肉垂が1対であることなどからそれと知られる。その分布区域は，ニューギニアの西にあるセラム島である。この図は，仙台藩医で著名な蘭学者大槻玄沢（盤水）の著書「蘭畹摘芳」（1819年）に載せてあるものである。江戸時代の学者たちが，ヒクイドリとダチョウとを混同し，「食火鶏，一名駝鳥」と書いているのが多いのに対し，玄沢はオランダ語の本によったのだろうが，この図の鳥の趾を3本に描いて，2趾のダチョウとははっきり区別した。セラム島のヒクイドリ1羽がオランダ船アムステルダム号の船長の手にはいったのは，文禄4（1596）年のことで，その翌年オランダに送られて人気を集めたというのが，ヨーロッパに知られたはじめである。それから70年近くのちの1663年に，日本にはじめて渡来し



大槻玄沢「蘭畹摘芳」にある『食火雞図』

たヒクイドリも，おそらくセラム島産のものであろう。長崎に来航するオランダ船の基地がジャワ島にあったことからも，その可能性を考えることができる。

ヒクイドリのその後の渡来は，享保7（1722）年，安永7（1778）年，寛政元（1789）年と何回もあり，天明6（1786）年には江戸まで運ばれてきた1羽がある。寛政元年7月長崎へ持ち渡られたヒクイドリは，翌2年大阪に連れてこられて，5月から道頓堀で駝鳥だという触れこみで見せ物になった。それを見た蒹葭堂木村孔恭が，「蘭語にカスワルといふ，又俗に駝鳥といふ，然れども食火鶏と駝鳥とは別なり」（「蒹葭堂雑録」）と，ダチョウとの区別を書いたのは，さすがに博物学者である。カスワルはポルトガル語の casuar で，英語の cassowary である。この大阪へきたヒクイドリは，さらに江戸へも運ばれて見せ物になった。

天保11（1840）年秋，京都へきたヒクイドリは，この年の春か前年に長崎へ持ち渡られたものであろう。「重修本草綱目啓蒙」（1844年）という本の禽部「増」の條下に，「天保十一庚子年秋京師京極街善長寺ニテ観場ニ供ス……火ヲ食フコト能ハス梅ノ大サナル石或ハ鉄ヲ食フ只緩歩シテ飛ブコト能ハス」と記す。この本は著者小野蘭山の没後，京都の梯南洋の増修したものである。それゆえ，この「増」の記事は原著者蘭山のまったくあずかり知らぬことであるが，ヒクイドリ渡来の記録として重要であり，その記述も正しい。善長寺は京都市新京極に現存する。■

（動物学者）



読者のアルバム　5

子どもとウマ　写真と文　中本教一

北海道江別市の郊外を流れる石狩川の付近には，まだまだ自然が多く残っており，緑がとても豊かです。近くに酪農家が多いせいか，広々とした河川敷には，よく乳牛や農耕馬が放牧されています。

大のウマ好きのわたしは，ときどき散歩がてらウマを見に出かけるのですが，先日は２歳になる知人の子を連れていきました。すると「ウマちゃんと遊ぶ」といってききません。万一，けられたり，かまれたりしてはたいへんだと，恐る恐る近くまで連れていきましたところ，そんな心配もなんのその，写真のような場面になったのです。少しも恐れず，信頼しきって近づいていく子どもの気持が，そのままウマに受け入れられたのでしょうか。

ウマは動物のなかで，もっともよく人の心を読むといわれ，また，わたし自身も長く馬術をやってきましたので，実感としてそれを感じていましたが，このような場面に出会ったのは，はじめてでした。

現代の人間たちのなかにはとても見られないような，このウマのやさしいまなざしに，わたしもすっかり心がなごみ，久しぶりにさわやかな１日でした。■

（江別市・24歳・農場勤務）

仲間のひろば

ニワトリの知能

わたしはニワトリの知的能力について，次のようなことは認めてもいいと今でも考えている。もう20年も前のことになるが，わたしは３軒長屋に住んでいて，ニワトリを２羽飼っていた。昼間は敷地内で放し飼いであったが，ほかの２軒も同様な飼育法であった。しかしえさをやるときに困った。「とおー，とおー，とおー」と呼ぶと隣のニワトリも走ってくるのである。

そこでひなのころから，ニワトリの名まえを呼んでえさをやることにした。１羽は黒いのでクロと呼び，１羽は茶色なのでアカと呼んでえさをやった。すると中びなになるころにはすっかり自分の呼び名を覚え，柵をした畑の向こう側で隣家のニワトリと遊んでいても「アカ，アカ」「クロ，クロ」と呼ぶと走ってくるのである。翌年，アカとクロを売って白色レグホンを育てたときにも，同じ実験を試みた。こんどはシロと名づけたわけだが，隣の家でえさをやるときに「とおー，とおー，とおー」と呼んでもシロはおちついたもので，隣のニワトリがえさをもらうのを見てあわてる始末だった。

もうひとつは，ニワトリが自己の領域を認識できたことである。イヌが庭に侵入してくると騒ぎだし，わたしが庭に立っているときには，イヌが階段を登って侵入しようとすると，戦闘態勢でイヌの前に立ちふさがった。飼い主に対し絶大な信頼感をもっていたのである。■

（長崎市・甲能俊雄・39歳・教員）

▶編集部から

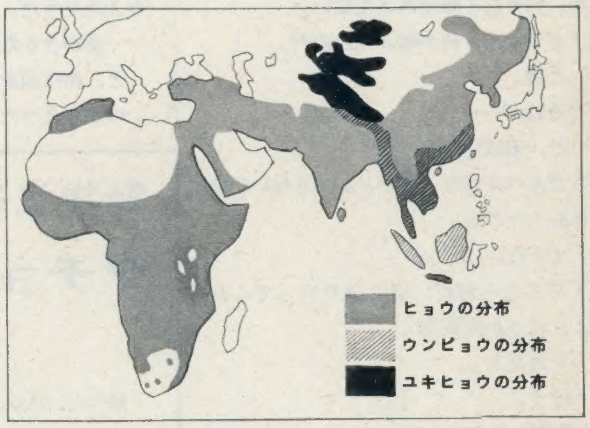
第19号９ページ掲載のヒョウ，ユキヒョウ，ウンピョウの分布図に誤りがありましたので右図のように訂正します。

〔作図参考文献〕

♣ Gordon D.Cordet etc. ed., 1970, The living world of animals, Reader's Digest association, London

♣ Jean Dorst & Pierre Dandelot, 1970, A field guide to the larger mammals of Africa, Collins, London

♣寿振黄主編「中国経済動物誌」，1964，中国科学出版社，北京



ペット相談室



担当
高橋達志郎
（小鳥の病院院長）

〈問〉　差餌中のブンチョウのひなが，食欲はあるのですが，口のなかにえさを入れてやると飲みこめず，口のなかに黄色いものができ，首のところが赤くむくんだようになって，そのうちに落鳥してしまいます。このような状態で，ここ３年間ほどに若いジュウシマツやブンチョウを次々に死なせているので，これらの原因と治療法，購入の際の注意などを教えてください。

（川崎市・長谷川幸江・21歳・学生）

〈答〉　口から嗉嚢（そのう）にかけて繁殖する一種の原虫性疾患で，トリコモナス症だと思われます。ほとんどの小鳥に感染し，ことに抵抗力の弱いひなに多く発症します。感染初期の症状は，首のところがなんとなく赤く見えるだけで，ほとんど見のがされてしまいます。そのうち，さかんになまつばを飲みこむような動作を繰り返すようになり，えさの飲みこみが悪くなります。

さらに症状が進むにつれ舌のつけ根や食道に潰瘍が生じ，黄色の膿のかたまりができ，小鳥は痛さのために食欲がなくなり，頭を背中に入れて１日じゅうふくらんで眠るようになります。

治療には，サルファ剤やフラン系の薬が有効ですが，よほど初期に発見して治療を施さないかぎり，薬効を望むことはできません。

人に伝染することはありませんが，他の小鳥には経口的に伝染するので，一度発症したときには，今まで病鳥の使用していたものはすべて熱湯をじゅうぶんにかけて，殺虫する必要があります。病鳥に触れた手は，必ず薬用石鹸などで消毒してから，他の鳥に触れるようにしてください。

小鳥のひなの購入の際は，首すじをよく調べ充血しているものは避け，心配なときには専門家に調べてもらうとよいでしょう。■

〈問〉　ジュウシマツとブンチョウのひとみのところが，白く濁ってきて見えないようですが，治療法があったら教えてください。

（岐阜県・進藤久美子・25歳・公務員）

〈答〉　白内障（白そこひ）と思われます。これは，眼球のなかの水晶体（レンズの部分）が，ホルモン異常や他の原因で変性を起こし，白濁を生じますが，程度によっては，まったく失明してしまうことがあります。年寄りの鳥に多く発症しますが，白ジュウシマツの場合には，多分に遺伝的な要因があるようです。現在，残念ながら治療法がありませんので，失明したときには，できるだけえさ入れや水入れの位置を変えないよう，環境にならすことが必要です。■

裏表紙説明

ブリタニィスパニエルの子どもたち

生まれてはじめての旅を終えて，新しい土地の空気を，不安と好奇心とに満ちて吸った。人間の旅行する機会がふえるとともに，イヌの海外旅行もふえている。ホモモーベンス〔移動人間〕に対してカニス〔イヌのラテン語名〕モーベンスということばが生まれるかもしれない。

動物の場合も，入国する国によってさまざまな条件がある。しかし，イヌの政治的心情を問題にするわけではない。あくまでも伝染病などを入れない，防疫のためなのである。

海外から日本にイヌを入れる場合，出発国がどこかによって違いはあるが，だいたい14日から30日間の繋留期間が必要とされる。その間，羽田や横浜でとどめおかれることになる。アメリカ合衆国では繋留期間はないが，イギリスは日本よりも長い期間がいる。■　**Ph. Buzzini**

□原稿募集□

本誌『私たちの仲間』では，次のような原稿，写真を募集しています。

☆仲間のひろば　☆ペット相談室　☆読者の研究　☆動物写真　☆その他

原稿は400字詰原稿用紙２枚以内。住所・氏名・年齢・職業・電話番号を明記。

〔あて先〕東京都千代田区有楽町２の３
朝日新聞社「世界動物百科」編集部
『私たちの仲間』係

▶おことわり　本号『もうひとつの世界』は休載します。

黒い猟犬とえぞ雷鳥　ジャン・バティスト・ウードリ



油彩
カンバス
109×126センチ
オルレアン美術館

ウードリは，18世紀フランスにおける最も傑出した動物画家のひとりである。最初は，当時の多くの画家たちと同じように，肖像画家として出発したが，動物画がよほど得意であったらしく，先生や仲間の画家たちからすすめられて，動物画家になったという経歴の人である。

この作品では，丘の斜面の2本の樹の間に，狩りの獲物であるえぞ雷鳥がぶらさげられており，1匹の黒い猟犬が，前の片脚をやや曲げながら，その獲物をじっと見ている。この絵についての解説などを見ると，銃声を合図に，猟犬がいままさに獲物にとびかかろうとしているところだ，というようなことが書かれている。私は狩猟のことに暗いので，その意味がよくわからないが，もしかしたら，そうして犬を訓練するやり方があるのかもしれない。

しかし，絵画的に見れば，狩りの獲物と犬というこのような主題は，当時の動物画において，好んで取り上げられたものである。もちろん，構図はさまざまであるが，死んだ獲物と生き生きとした猟犬と，すなわち，生と死のふたつの状態を画面に描き分けるというのが，画家にとっての腕の見せどころだったのである。ウードリも，同種の作品をいくつも残しているが，ここでは，片脚と翼をだらりとたらした生気のない鳥と，大きく輝く眼をした犬との対照が，色彩の上にまではっきりとあらわれていて，興味深い。■　（高階秀爾）

第1号～第64号(概説・哺乳類)のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

世界動物百科　通巻31号　昭和46年10月10日発行(毎日曜日発行)　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



ブリタニィスパニエルの子どもたち　説明 30ページ

雑誌 0632—10／10